

# 針葉樹会報

第95号  
2001年12月



## 目次

浦島太郎の記	石原 脩	12
古希の奥穂高		
——オーション会半世紀記念・旧友追悼を兼ねて	松尾 寛二	12
ツール・ド・シルクロード 続編	春日井 実	15
カラコルム国際大学	丸子 博之	18
平川紀男追悼登山	平川 茂	20
平川紀男君のレリーフ再訪	佐藤 久尚	21
ノルウェー最高峰、 ガルホーピッゲン登頂	前神 直樹	23
三浦半島、地形が語るもの	川名 真理	26
九州山登り小話	淵沢 貴子	27
会務報告		30
編集後記		32

1943年夏の涸沢合宿。右から真木、樋口、野尻。  
写真||真木淳一郎

### 追悼

樋口洪君の思い出	奥村 一郎	2
樋口洪君のこと	野尻 七郎	3
善人・樋口洪君に捧げる言葉	真木淳一郎	4
樋口さんを悼む	山崎 擴	6
加藤正巳君を偲んで	中村 雅明	8

発行日 2001年12月26日

発行者 針葉樹会

印刷所 ヤマノ印刷(株)

針葉樹会報  
第95号

編集人 佐薙 恭

〒240-0066

横浜市保土ヶ谷区釜台町5-4-806

会報幹事=佐薙 恭、井草長雄

川名真理、大谷公重



樋口洪君の思い出

奥村 一郎（昭和22年卒）

樋口君と会ったのは1941（昭和16）年。東京商大予科に入学して同じ四組に配属された。爾来60年の付き合いとなった今年、天は無情にもこの好漢を我々から奪い去った。

予科のクラスの席順はアイウエオ順だったので、席の近い永井正君（樋口君と同じ北海道生まれ）あたりが、彼と最初に親しんだようだった。しかし42年の暮れ、所属していたサッカー部の先輩の勧めで、私は山岳部の乗鞍スキー合宿に参加し、小林先輩の指導を受けたりした。もともと山が好きだった私は、その後も山岳部の部室に出入りしてバック台を引いたり、『針葉樹』を読んで先人の偉業や遭難記事に胸を躍らせた。

私が50歳になった時ギックリ腰のひどいになり、再発予防の運動に山登りをやることにしてから、樋口君との交際が始まった。ちょ

うど百名山の本が話題にのぼり、私も登頂を志した。

彼は八ヶ岳に誘ってくれ、松原湖から本沢温泉泊、東西天狗、渋温泉へ下る。渋まで遠くて顎を出したが、彼は黙々と先を歩いてさすが山岳部と感心した（76年7月）。これでテストに合格したのか、同年、秋の体育の日に美ヶ原から霧ヶ峰を有料道路が開通する前に歩こうと言われた。美ヶ原から扉峠の扉山荘に泊まった（奇しくも22年後の98年10月15日、合同クラス会が四組の樋口君の幹事役で峠の下の扉温泉明神館で行われ、彼と昔を語った）。

80年7月には彼の作った大泉（山梨県）の山荘に招かれ、行った日の午後天女山から吐龍瀧を歩く。その夜は彼の手料理のジャガ芋とタマネギの味噌汁（誰がやってもうまく出ると教わる）とライスカレーを御馳走になった。次の日は清里、千ガ滝、飯盛山、野辺山に行った。

同年9月13〜15日は、彼が青春の日の思い出深い涸沢、穂高へ行くと言うので、さつきく同行を申し出た。横尾に泊まり涸沢ヒュッ

テに荷物を置いて、軽装でザイテングラード往復、奥穂高に登る。天気は最高で、初めての北アルプスに唯々感激した。

同年の文化の日、彼の山荘から甲武信へ。頂上小屋に泊まり、翌日は寒いので雁坂峠へ行くのを止めて、広瀬に下った。予科に入った年の十月、専門部山岳部の六人が東沢から登り、冷雨で遭難したので、彼も広瀬の本部で連絡役をしたことなど聞いた。

その後、彼は久保孝一郎先輩を、私と共通点が多いと紹介してくれた。以後、常念岳を皮切りに山やスキーに久保さんと同行するようになったが、彼の温かい配慮に感謝している。

樋口君の人柄は北海道生まれのせいか、おらかたで、しかも事務的にも有能であり、前述クラス会でも下見をして万全を期した慎重さであった。

彼がくれた古いスキーのズックの袋にはNOMURA、OTARUと印刷されていた。そのズックの袋を再利用して、木彫りの道具袋を作った。道具を使い、袋のネームを見るたびに、彼を思い出す。



予科3年の樋口(前列右から3人め)と山岳部員たち。1943年夏の涸沢合宿にて。前列右2人めから倉田、樋口、真木、石井、亀井。中列左、大河原。後列右から中村、3人め・大島、5人め・野尻、6人め・田中。写真提供=野尻七郎



## 樋口洪君のこと

野尻 七郎 (昭和22年卒)

太平洋戦争の始まった1941(昭和16)年予科入学、41、42年は他の同好会に所属していたが43年2月山岳部主催の妙高高原スキー合宿に参加したのを機に、樋口君にすめられ、山岳部に入部。同年7月、樋口君がリーダーの、夏の涸沢合宿に参加した。

当時、新入部員も多く参加、多人数のにぎやかな合宿であった。初めての重い荷物を背負ったの徳本峠の急坂にすっかりへばってしまっただが、ひ弱そうに見えた樋口君がものすごくタフで、我々を励まし手伝ってくれて、無事徳本峠を越えることが出来た。彼のたくましいリーダーぶりに、これが山男かと感心もし、尊敬もした。

その後だんだんに戦争も激しくなり、学徒出陣で軍隊にゆく時期もせまってきて、43年10月頃、最後の山行になるかも知れぬと、彼と二人で信州峠を越えて瑞牆山に行った。途中、増富鉱泉に一泊、国道でトラックを止め



て中央線の駅まで乗せて貰ったり、思い出の多い山行であった。

戦争は我々の人生を予想外の方向に変えてしまったが、あの戦争がなければ二人は良きパートナーとして数々の山行を楽しむことが出来たであろうと残念でならない。

彼はいつも沈着冷静で心の温かい人であった。彼の人柄は、すばらしい人格者であった。ご両親のご薫陶の賜物であろう。今は滋味溢れるこの両親の下に帰り、静かに眠りについでいることであろう。ご冥福をお祈りします。

### 善人・樋口洪君に捧げる言葉

真木 淳一郎（昭和22年卒）

クラスメイトでもあった樋口洪君がさる6月3日逝去した。1943年（昭和18）学部へ進学した同期の山岳部員は樋口、野尻と小生の3名であるが、彼、樋口君は遭難続きで新入部員皆無の年、「自分は一橋の山岳部に入りたくて商大を受けました」と単身部室を訪問したという。彼らしいひたむきな態度に、

予科2年の樋口（後列左から4人め）と山岳部員たち。1942年8月、本科三年の先輩たち（前列右から久保、斉藤、山田、根本、佐藤、川村、林、中列右から4人め・森）の送別会にて。中列右から松下、細野、ひとりおいて森、小林、清水、原田、中林。後列右から大崎、石井、中村、堀岡、大河原、山崎、林戸、樋口、間々田、大野、倉田。  
写真提供＝石井左右平





先輩諸氏もいたく感動して大歓迎をしてくれた由、卒業50周年記念文集に自ら記録している。

その翌年に野尻君と、ポート部脱退のためという不純な動機で入部した小生が加わり、石井、山崎、故中村（為治先生の息子）君等の後輩が賑々しく参入したので心の支えとなったと述懐されている。

この記念文集に小生は厚かましくも、山岳部員としてのよき思い出を、いけしゃあしゃあとPRしたが、汗顔のいたりである。例によつて山に関係のない、形而上的な、あるいは形而下的な接触を通じ、彼のプロフィールを紹介できればとペンを執り、もつて彼の冥福を心からお祈りしたい。



樋口君と私は、大学でのゼミナールも、上辰さん（上田辰之助教授）へと、偶然の一致であるが、卒業50周年記念文集中の「亡き師・亡き友を偲ぶ」欄での回想も、彼と私のものはまったく同一内容となった。

新ゼミナリステン歓迎兼学徒出陣壮行会に、愛妻アヤノ夫人（小生の亡妻も紋子と名前はよく似ているが……）同伴の老師、諄々と説いて曰く、「どこに捨てよかこの糞袋」という開き直りの発想に度肝を抜かれ、また「もし幽閉拘束の身とならば、聖書とシェイクス

ピア作品集を肌身離さず持ち込みたい」という大胆にして率直な本音を吐露された。樋口君も私も、その夜の感銘が忘れられなかったのだろう、奇しくも共感の回想を同じくした。地方在住の戦中派学徒の小生は、後にも先にもゼミで学習する機会は少なく、最初にして最後のゼミナール学習ともなった。

「多瑪書屋」で知られる吉祥寺の教授宅へ卒業論文を持参した折の感慨も、この記念文集に記載した。

会社退職者有志の俳句会が発行する句集のエッセイ欄に、何年ぶりかで邂逅した樋口君との思い出がのつている。即ち、87年6月、学友H（樋口）君と渋谷八千公像前で落ち合うことになった。勝手知つたる渋谷駅を出た所、若い男女がたむろする新名所となつており、老紳士の出会いにはいささか場違いの感なきにしもあらず。

「待ち合わす八千公像の若き傘傘」とつづやきながら、駒形どぜう渋谷店の暖簾をくぐる。その後は看板までの一刻を、今は懐かしいどぜうを肴に、しばらく会わなかつた空白を一挙に埋め尽くす青春回顧と、ほろ苦い人生談義の一夜となった。

「旧友と久方ぶりに泥鰌鍋」と川柳調の俳句を問題提起した（必ずしも季語がハッキリしない）。俳句を始めた頃の小生にとって、こ

の五七五の短詩に万感の想いを込めたつもりである。当時としては珍しいどぜう（客体）と、やや色褪せた友情（主観）が交錯する新俳句と気負つたが、ひとり相撲。俳句は今もつてわかり難いものと慨嘆した。

43年に学部へ進学を共にした同期会の全国大会が年一回行われるようになり、卒業50周年の年（97年）は、前述の記念文集発刊と、下呂は水明館にて全国大会が盛大に行われた。山へは登らなくなった老岳友だが、この機会にせめてロープウェイで西穂高と笠ヶ岳など間近に眺望しようと、奥飛騨温泉へ足を延ばしたが、あいにくロープウェイの休止期間で目的を果たさず、露天風呂で檜などを遠望して別れた。

翌98年の同期会全国大会は、わが組が当番に当たり、幹事長の依頼で樋口君が幹事役を引き受け、松本郊外、美ヶ原の扉温泉明神館を候補地とする下見に、頼まれて参画した。前年の下呂水明館に見劣りしない設備と立地条件の会場決定に、声援を送った。大会翌日の松本城・安曇野巡りのエキスカーションを予約し、帰途、小淵沢から八ヶ岳山麓の彼の山荘を表敬訪問して別れた。

（注1）大会翌日の観光エキスカーション後、またまた有志を誘い、貫通した安房トンネル経由で新穂高温泉泊、翌日ロープウェイに搭



乗はしたが、台風之余波で視界はゼロ、「再び西穂は見えず」と、ドシャブリの大雨で終わった。会報87号記載。

注2 その翌年、会社OB有志の別所温泉の懇親会后、ひとり乗鞍高原の山荘に泊まり、乗鞍スカイライン・平湯経由で、三度目の新穂高ロープウェイに挑戦、待望の展望を満喫した。

毎年の全国大会は40名以下の参加者で、体調不良や療養中の不参加が最も多く、今さら同期同窓会への興味を失った者も少なくない。最近では夫人同伴が7、8組おり、誠にほほえましく、羨ましい限りである。彼、樋口君は最近の年次大会には欠かさず出席していた。

昨年の大津琵琶湖ホテルでの大会への出席が最後になったが、会食前の3分間スピーチで、彼は「いつもこの会には参加してきたつもりだが、来年のこの会には、果たして出席出来るかどうか、自信がない」という弱気な発言。おやっと思つたが予言はまさに適中した。今年は9月志賀高原渋温泉での年次大会であったが、予告通り彼の姿は、ついに見られなかった。

「のんべー」というニックネームにふさわしい顔色で、一見病人には見えないが、彼はこのところ何年か腰痛に悩まされ通しだった。亡妻も腰痛があつたため、同病相あわれむ交

信だった。昨年11月上京の折、奥村君と樋口邸に見舞いに参上した。ロッキングチェアで無聊をかこつていた彼と会つたのが最後だった。

別れぎわ「山の近くの温泉へでも行ける日が来ればいいがな」とつぶやいた彼。小生は本年5月、海と梅林を見下ろす熱海の老人マンションに転居して、毎日温泉に入つてはいるが、何か空しい毎日でもある。部屋の周囲は樹々が鬱蒼とした森林の丘が遙かに連なり、山という程の高さはないが森林浴に浸っているのは幸せだと思ふ。樋口君も耐え難い痛みから解放され、今は安らかに好きな山々と我々を見守つていてくれるに違いない。

合掌。

## 樋口さんを悼む

山崎 擴 (昭和23年卒)

何事にも波があるようで、山岳部の入部者も例外ではなさそうだ。私たちが予科1年春に入部したときは6人もいて、またそれがかなり騒々しい連中であつたのに、その時2年生であつた樋口さんはたった一人であつた。

いまOB名簿にある真木さんや野尻さんはその後の加入である。私たちの入部した前年の秋には、専門部の部員が奥秩父で壊滅的な遭難をしたのであつたから、余計に心細かつたに違いない。それでも樋口さんはいつもニコニコと温和な笑顔で、何かとはみ出しがちな我々新入生をコントロールしておられた。

最初の夏合宿は例によつて穂高であつた。新米の私たちは北尾根などの稜線を引き回されるばかりであつたが、樋口さんは、もう滝谷のパーティに加えられて稜線を越えていった。羨ましかつた。来年は連れていつてもらえるかと、涸沢岳の上から険しい岩壁を恐る恐る覗きこんだものだ。しかし、その来年は



もう来なかった。

その年の秋からは、勤労奉仕などというものが始まって、授業も切れ切れとなり、勉強しなくてもよくなったのは嬉しかったが、部活動も窮屈になっていき、組織的な合宿は暮れの乗鞍でおしまいになった。その後はもう戦争一色。勤労動員やら、出陣やら、ご存じの通りの有様で、学校も部活動も休止状態となった。

敗戦、学校再開となったものの、登山など思いもよらない。そんなところへ、中村が持ち込んできた話によると、彼の叔父さんが埼玉のほうで旧飛行場を開墾する権利をもらって作業をしていて、手伝えば、取れたジャガイモを分けてくれるという。山へ行くにもまず食糧だから、春休みにもなったことだし、やってみようという事になって、樋口さん以下、中村、石井など4人ほどで部室に泊まり、飯能近くの元飛行場まで通うことになった。

しかし、飛行場というのは、土の部分が何層にもローラーで固められている上に、厳冬の寒気で凍っていて、スコップで体重を乗せたぐらいではほとんど食い込まない。1日頑張っても1坪も耕せない。苦闘の何日かが過ぎて、ようやく少し慣れてきたころ、部室に帰って休んでいると、誰であったか忘れたが、背中に白いものが動いているのが目に入った。

兵隊生活ですっかり馴染みになった「風」

である。当時はそう珍しいものではなかったのだが、その翌日から樋口さんがいなくなつた。残った面々も次第に氣力を失って何となく止めになった。ほとんど実績は上がらなかつたが、夏時分にその叔父さんなる人が、芋を一袋、部室に投げ込んでいつてくれた。

どうもとりとめない話になってしまったが、樋口さんと最後に「山に行つた」のは4年程前の初夏、小林、松下氏なども誘つた甘利山であつた。直下の駐車場からゆつくり登つた頂上は、まだツツジは咲きはじめてばかりで、寒かつた。そこを降りて青木鉱泉に泊まり、翌日は木曾駒のケーブルに乗り、千畳敷に出た。わずかに残つた雪溪でスキーをする人達があつた。その雪溪までケーブルの駅から20mほど降りてみたのだが、樋口さんは「上で待つ」といわれて降りなかつた。前日の甘利山はよほどきつかつたか、と初めて氣が付いて申し訳ない氣持ちであつた。

学校といい部生活といい、まことに目茶目茶な時代を過ごしたのだが、樋口さんはいつても、温顔に笑みを湛えて、我々のわがまま勝手を包容してくれていた。もうその笑顔を見ることができないと思うと、大きな穴が開いたような心持がする。今ごろは須弥山に登っているかもしれない。ご冥福を祈る。



## 追悼・加藤正巳さん

### 加藤正巳君を偲んで

中村 雅明（昭和43年卒）

#### 1 闘病のこと

9月17日の夕方、会社に家内より電話があり、加藤君の逝去を知った。

逝去の数日前に見舞いに行かれた三森さんからのご連絡で危篤状態と知っていたのだが、逝去の知らせは大きなショックであった。

彼の入院を知ったのは2月22日で、奥さんより家内が電話を受け、既に手遅れの末期癌で、手術の施しようがなく、医者から余命1ヶ月余りと宣告されている事を知った。

実は昨年未だに、長澤さんから、「池知さんの話によると加藤君が肩が痛く、手が上がらないようだ」とお聞きしていた。その時は、五十肩かなと思ったが、池知さんから聞いた今年の年賀状に、「同期の加藤氏体調宜しくないようでした（1ヶ月前）」との知ら

せがあり、心配になり、1月5日に見舞いの電話をしたところ、奥さんより「たいしたこととはなく、元気に会社に行っています」とお聞きし、すっかり安心していった。娘さんの受験が一段落する頃、遊びに行く約束もしていたので、そろそろ連絡しようと考えていた矢先のことだったので、本当に驚き、何たることかと暗澹たる思いであった。

3月の初旬の日曜日に、家内と二人で昭和大学藤が丘病院に見舞いに行ったところ、痛みがひどく、モルヒネを使用しているのとことで、意識が混濁し、かすかに目を開けて「すみませんね」と言うだけの状態であった。その日は本人と話をするどころではなかった。

奥さんの話では、1月に検査入院、2月中旬に肺癌である事が判明、既に頸椎にも転移しているため、手術する状態ではなく、痛みを和らげる治療しかできないとの事であった。本人は回復を信じているとの事であったが、奥さんは既に覚悟を決められている様子であった。若い頃の癌は進行が早いと聞いていたので、危険な状態と感じて病院を後にした。ところが3月25日、桜の花が咲き始めてい

た日曜日に2回目の見舞いに行った時には、思いがけずすこぶる元気で、私の再就職のお祝い、札幌、高松での生活、金魚飼育、写真の趣味の話など、自分から積極的に話をし、癌も治ると希望を持っている様子であった。しかし、本人の明るさとは逆に、奥さんからは深刻な状況を聞いていたので、心の中では暗い気持ちで払拭できなかった。でも、その日の会話が、彼と交わした最後の会話らしい会話であった。

その後の見舞いの時は、うつらうつら眠っている状態の時が多く、時折、目を開けた時も、彼とまとまった会話をすることは出来なかった。特に医者から再度の告知があった後は、彼の心中を察してこちらからも慰める言葉も見つからない、つらい見舞いが続いた。特に痛ましかったのは、肺癌が頸椎に転移したので、首を少し動かすだけで、身動きできず、手先でテレビのリモコンをかるうじて動かすだけの容態であったことである。

「少しでも車イスで移動できれば……」と奥さんも願っていたが、入院も2ヶ月を越える頃に、床ずれがひどくなり、手術を余儀なく



され、癌との二重苦で地獄の責め苦ともいえる絶望的な闘病だった。そんな状態でありながら、ご家族も、何度も何度も誤診ではないかと疑ったほどの体力と精神力で癌と闘い、初診では余命1ヶ月と宣告された状況をはね返し、5月も6月も乗り切った。

7月初旬には、ホスピス病棟のある川崎市立井田病院に転院した。奥さんからも「体調としては下降線をたどっているようですが、環境は最高です」とご連絡をいただいた。家内と二人で見舞いに行った時も、一般の病院とまったく違った環境で心穏やかに過ごしている様子だった。7月21日に思いがけない転院の挨拶を受け取った。奥様の了解を戴いたので、その時彼から受け取った葉書を原文のまま紹介したい。

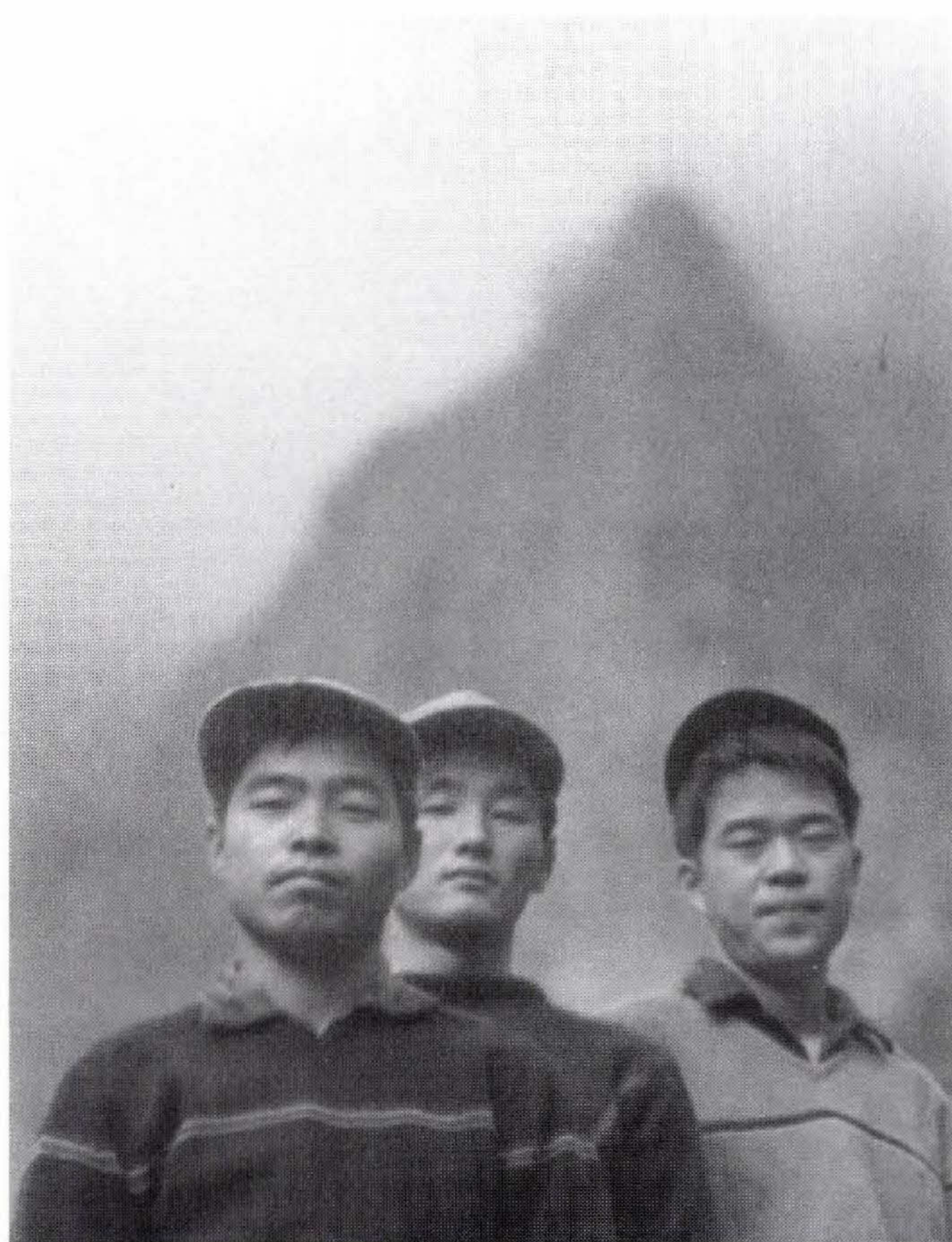
「前略 いろいろご迷惑をおかけしております。過日はご多忙のところ、お見舞い賜り大変ありがとうございます。さて、私、都合により7月5日より下記の処へ転院しましたのでご連絡申し上げます。癌との闘いは、まだまだ続くものと覚悟致しておりますが、お礼並びにご挨拶申し上げます。どうぞ皆様にはご自愛下さる様、お折り申し上げます。早々」

この葉書で、癌との闘いの気力が衰えていないことが窺え、安心した一方で、転院の挨拶とは何と律儀なと違和感も覚えた。でも、今にして思うと、これは死が近いのを覚悟して、転院のお知らせの形で最後のお別れの挨拶をしたのだと思う。今年の夏はかつてない酷暑であったが、それも乗り切った。しかし9月に入って病状が悪化し、9月17日の8時55分、7カ月に及ぶ癌との苦闘に終止符を打ち、帰らぬ人となった。

治る見込みのない絶望的な癌との闘いは、苦しかったと思う。まだやり残したこと、これから新たにやりたいことが山ほどあったと

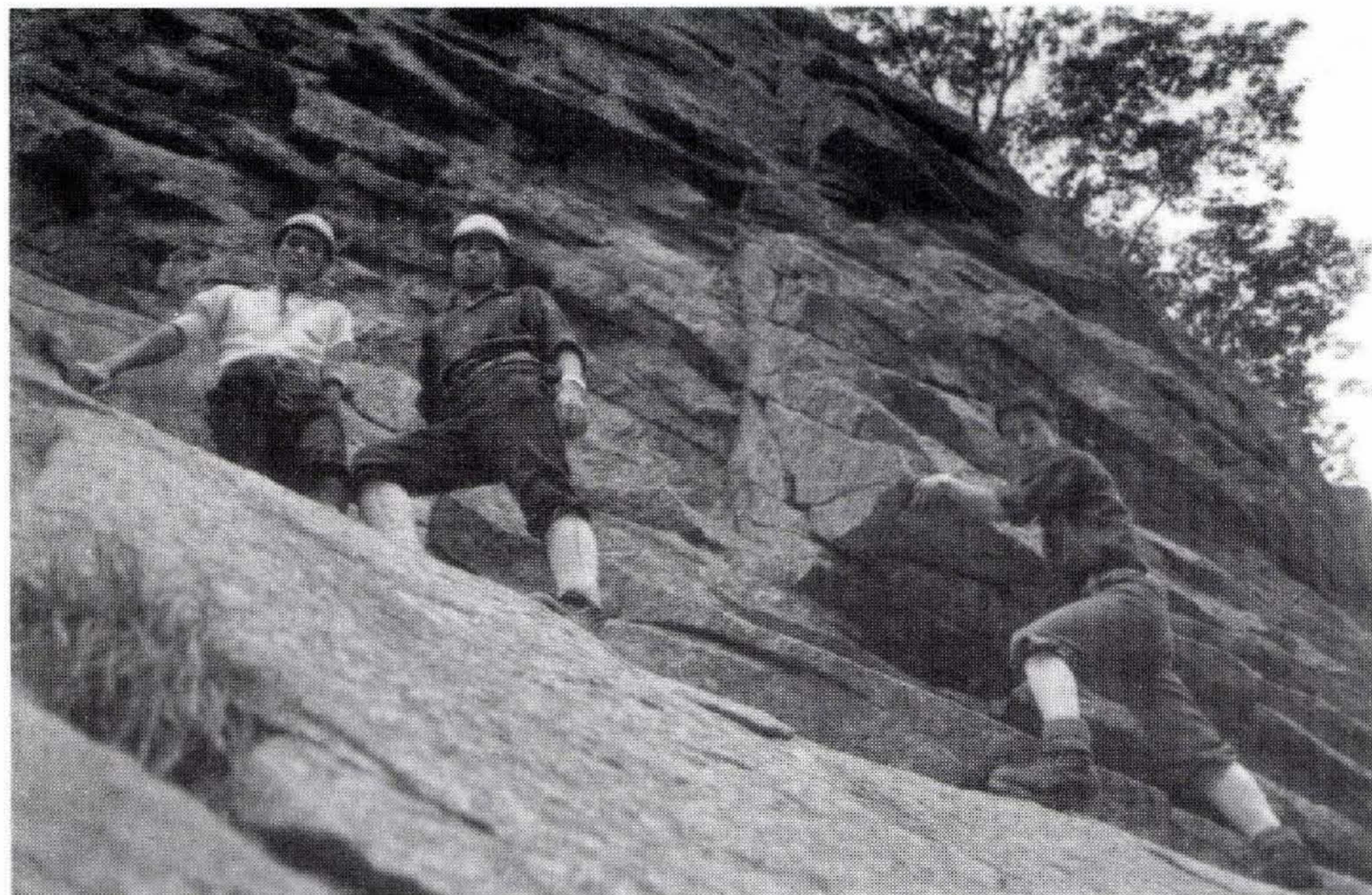
思うと、無念であったと思う。奥さんからやすらかな最後であったと聞いたことが、せめてもの救いである。おそらく、転院の後の2カ月余りは、病床にずっと付き添って手厚い看護をされた奥さまとの、最後の安らぎの時であったと思う。

告別式で遺族を代表してご挨拶されたご長男・雅永氏のご挨拶の冒頭の「無念だったと思います。でも最後まで癌と闘い抜きました」の言葉に、7カ月にも及ぶ闘病の有様が言い尽くされている。



大学4年の加藤(右)と同期の金成(中)、中村。谷川岳にて。写真提供=中村雅明





大学4年の加藤(右)と同期の中村(中)、金成(左)。  
写真提供=中村雅明

「本当に良く頑張ったね。立派だったよ」と心の中で彼に呼びかけて、最後のお見送りをした。

## 2 思い出すこと

同期の金成君が、昭和61年2月に42歳の若さで肝臓疾患で亡くなり、今度は加藤君が逝ってしまった。一人残され、寂しき限りである。もう同期会も開けないのだから。他の学年と違って、途中入部、退部した部員がいなかったのも、1年から4年まで同期3人だけの現役時代だった。金成君は肝臓疾患で合宿に参加できないことが多かったのも、加藤君と一緒にの山行が多く、彼との思い出は多い。特に強く印象に残っている山行を、彼を偲ぶよすがとして幾つか書いてみたい。いずれも南アルプスの思い出である。

やはり1年の新人合宿が思い出深い。彼と同じ山登り未経験とはいえ、私は五日市という東京の山里に育った。それに比べて、加藤君の第一印象は、都会育ちのやんちゃ坊やがそのまま大学生になった感じで、山男とは縁遠い、どちらかというといひ弱な印象だった。最初の合宿は5月の連休、南アルプスの夜叉神峠から鳳凰三山へ早川尾根へ北沢へ戸台だった。

金成君は参加できず、新人は加藤君と二人だった。彼は歩き始めからすぐバテてしまい、初日は難行苦行の一日だった。その晩のテントの中では、先輩から足裏一面に出来た水膨れを治療のため鋏で切られて、赤チンを塗られて悲鳴をあげた事、コッヘルをひっくり返し、熱湯を手にかけて、火傷をしたことを覚えてる。

よく覚えていないが翌日以降も大変だったと思う。彼にとってはおそらく散々な初合宿であったと思う。それはともかく、帰ってから皆に大笑いされ、事あるごとに話題にされたことがあった。どこであったか場所は忘れたが、川原を歩いていて、途中、丸木橋を渡るところがあった。私は、子供の頃から渡り慣れていたので、難なく渡ったが、加藤君が続かない。「怖いよう」と叫んですくんでいく。それまで丸木橋を渡った事がなかったらしい。

それ以上に渡れない原因は、彼は内股で、足を八の字にしか丸木橋に置けないことにあった。逆八の字(ガニ股)でないとバランスが取れない。キスリングを背負っているのに、横向きではなおバランスが取れない。どう渡ったか覚えていないが、これももともと「女形の加藤」のあだ名がついてしまった。

1年生の春合宿の明神岳主稜線からの下山



の折、春近く、雪が団子になり、靴にべったり雪をつけて歩いてきた加藤君を見て、3年生の石田さんから、花魁道中だからかわれたこともあったのを覚えている。

こんな頼りないスタートで、途中で退部してしまうのではないかと心配したが、夏合宿を過ぎる頃にはすっかり逞しくなった。涸沢から剣沢までの長いダイヤモンドコースを二人で元気に歩き通したことが懐かしい思い出となっている。2年の頃には、「女形の加藤」のあだ名は自然消滅したように思う。

次の思い出は、2年の春合宿、三伏峠く塩見岳く北岳く池山吊尾根く荒川縦走の時、北岳から下山の途中で起こった加藤君の滑落事故である。強風のため、八本歯付近でフィックス作業中の加藤君が滑落した。幸い沢の途中で止まったが、足首を骨折してしまった。夕刻、やっとの思いで彼を引き上げ、強風下のテント設営中に、テントのポールを沢に流してしまい、ポールなしのテントの中で、強風に煽られるテントを押さえながら夜を明かした。骨折でひどい痛みだったと思うが、うめき声も上げず、テントの奥でじっと寝ていたのを思い出す。

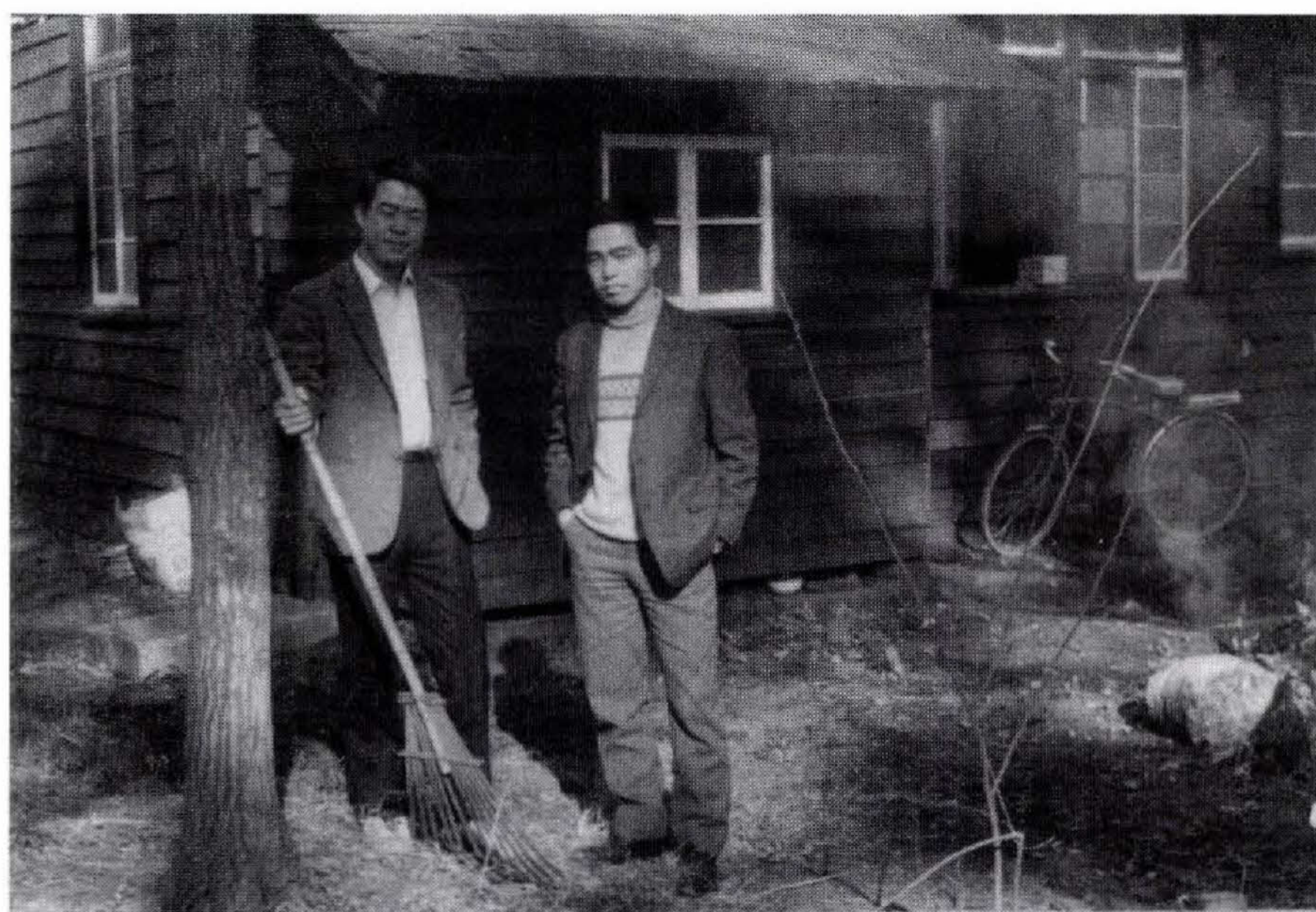
その後も、彼を交代で背負いながら下山に数日を要したが、最後まで弱音を吐かなかった。現役時代にはあまり感じなかったが、バ

テてもくじけなかった事と合わせて、風貌に似合わず、精神的に強いところがあったのだと今にして思う。

あと一つ、彼が命の恩人となった思い出がある。4年生の夏合宿の前に、北岳バットレスの4尾根・中央稜を登りに行った。岩登りに関しては、彼の方が私よりずっとうまかった。4尾根は快調に登り、4尾根のコルから降りて、中央稜に取り付いた1ピッチ目、トップで登っていた私が、少しカブリ気味の岩壁でバランスを崩し転落してしまった。下にたたきつけられる前に、頭を下にした逆さま状態で止まり、一回転したらちょうど足が地面についた。地面まで1mとない、間一髪のストップだった。彼の確保が不完全であつたら、あの時命を落としていたに違いない。

彼との思い出は尽きず、まだまだ書きたいこともあるが、これくらいにしよう。

彼はあの世で、先に逝った金成君と久しぶりに酒を酌み交わしていることだろう。同期会はその世でしかできなくなってしまった。長生きできる自信はないが、あの世で二人に会ったとき、俺たちの分まで良く生きてくれたと言われるように努めたい。



卒業間近の加藤(左)と中村。旧部室前で。写真提供=中村雅明



## 浦島太郎の記

石原 脩 (昭和30年卒)

オーション会主催 (注・31ページ) の山行は9月3日 (月曜日) 徳沢園集合だったが、週後半に先約があり、それより前に奥穂を指したので、一人旅になった。

新宿8時30分発の上高地行き高速バスは、都庁の自転車置き場の奥にひっそりと佇み、ハイヒール姿の人々も加えて、予約の11人になつたら、さつさと定刻前に出発した。

若い運転手さんは、時速50km制限の大雨の中、また一人6000円の低料金にもかかわらず、2回のトイレ休憩もサービスして、12時30分に銀座並みに混雑の上高地に着けてくれた。

河童橋発13時。横尾山荘着15時30分。

宿泊代は、9000円出してお釣りが来ない。聞いてはいたが驚いた。しかし、指定された蚕棚はお角力さんにも眠れそうに広く、椅子・テーブル付きなので、まずは納得した。

間もなく「お風呂の準備が出来ました」と場内放送があった。昨年造つたとされる風呂は木の香も新しい。薪ストーブと囲炉裏、そして煤の旧概念は、これですべて払拭された。公衆電話があったので、本隊の佐藤幹事に通報した。「私は今、浦島太郎だ」と。佐藤幹事曰く。「徳沢園は旅館なので、満員だと顧客を断ることが出来る。横尾山荘は山小屋なので断れない」と。??

5時50分横尾発、9時40分涸沢小屋着。標高2350m。穂高小屋まであと660m。横尾山荘で昼食を予約しそこなつたので、800円のカレーライス注文したが、これが強烈なメッコ飯。とたんに涸沢にいるんだと実感した。昔のキジ場に猿が10匹。

ザイテングロードの登りは、体力の限界で苦しかったが、夕刻の穂高小屋はいつまでも続く残照が美しく、小屋の北斜面には数十台のカメラの砲列がしかれた。

奥穂頂上着6時30分、無風快晴。曾遊の山々との対話も一人だとすぐ飽きた。しかし別れる気にもなれず50分滞在。9時50分、涸沢ヒュッテの展望テラス着。ここからは涸沢圏谷の全容が見渡せた。登り終えた安堵感から、カップ酒の酔眼で一時間、至福の時を楽しんだ。

だ。

徳沢園に夕刻集合の日だが、時間がありません。横尾から蝶ヶ岳を往復した。

森林限界を超えた頂稜では、雲が低く、雲海は松本側に吹き飛び、時折は大滝山まで顔を出したが、霧を一杯に呑みこんだ梓川の谷は、時折雨となつたので、数多い崩れた梯子や木の根が滑りやすく、ちょうど1000mの登降に7時間を要した。

16時。新村橋への分岐表示を見たとき、ガクンとペースがおちた。

揺れながら歩く浦島太郎は、白髪のお爺さんになっていた。

## 古希の奥穂登高

——オーション会半世紀記念——

旧友追悼を兼ねて

松尾 寛二 (昭和31年卒)

これは正規の山行記録ではない。したがって行動時刻も定かではない。確かなのは20



01年9月5日、朝霧煙る奥穂高岳山頂に平均70歳の山男が7人、20歳の現役部員1人と共に立ったという事実だ。

もつとも「事実だ」と意気込むほどの快挙でもない。ただ古希の年に穂高に登れた筆者の幸せと、交友の喜びを感じ取って頂ければ幸いである。

15時、徳沢園に47年ぶりに懐かしい15人の顔が揃った。石井、望月、M中村、海老沢、石原、須山の諸先輩と石和田、春日井、佐藤、高崎、松尾、柴崎、T中村、上原、それに現役の山田君である。夕食後一堂に会すれば、全員たちまち学生の昔に還る。思い出話の合間に歌起こり、恒例の安曇節から野沢小唄、外国民謡、馬子唄……えんえん尽きる事が無い。

7時40分、すでに前日予定を消化した石原、須山、T中村、上原の4氏と徳沢で別れ、11人で涸沢に向かう。学生時代と違い、ザックが軽いので周囲を見回す余裕があるのが有難い。一昨年完成した横尾橋を渡り、小鳥の声に辺りを見回して姿を追い、濡れた石や草葉の美しさに目を驚かせながら、ゆっくり山道を辿る。やがて屏風岩を仰ぎ、これも初対面の本谷橋を渡ると、いよいよ急勾配だ。脚力

に余り自信はないが思いのほか楽に膝が上がっている。仲間への迷惑を考えて涸沢見物だけにしておくつもりだったが、だんだん頂上まで行きたくなってくる。足が痛み始めた頃、涸沢カールが見えてきた。前穂の3峰フェース、5・6のコル、北尾根。みんな昔のままの姿の出迎えを受けながら、14時過ぎ涸沢小屋到着。往年の思い出が次々に湧き上がってくる。よし、決めた。明日は登頂組に転向だ。

5時、朝食。涸沢散策の望月、M中村、柴崎3氏と涸沢小屋の娘さんに見送られ、登高組8人は穂高目指して5時35分出発。高度差100mごとに小休止を入れながら、ザイテンをゆっくり登る。涸沢カールを白い霧がベールのように覆い、峰に向かって流れている。時々ベールにポツカリ大きな穴があくと、そこに忽然と陽光に輝いた雪渓と黄葉した草付きが現れて、消える。アニメ映画のような妖しい美しさだ。岩陰の紫は桔梗かオダマキか、赤いのはシオガマか。鳥には詳しい佐藤も花には疎いのか、黙って通り過ぎる。弁当一つの軽装なので足も軽い。息も切れない。嬉しくなってきた。

8時20分、穂高岳山荘着。天空は青く広がり、冷たい風が汗ばんだ肌に心地よい。一息

入れて出発。山荘から直登する鉄梯子が氷の様に冷たいのも楽しい。薄い霧のかかった稜線を辿り、9時35分、全員無事に奥穂高岳山頂に到る。ついに古希の奥穂登頂が果たされた。有難い。少し興奮して山頂から東京の家族に携帯電話を掛ける。「絶対に無理はしないから」と約束してきた登山だった。妻も喜んでくれた。

山頂の祠に詣で、岩場に鎮魂の酒、ウオツカ、ウイスキーを注いで、甘利、Y中ならびに物故会員の霊を慰めた後、霧の流れる頂上で記念写真。並んだメンバーをご紹介しよう。  
〈石井さん〉山岳ゲリラの親分的風貌、日焼けした額に巻いたバンダナがよく似合う。我等若者を凌ぐ健脚で、常にパーティをリードする。推定年齢60歳。

〈海老沢さん〉体調不全とのことだが、やはりゲリラの一味らしい雰囲気。ダブル眼鏡型カメラと三脚を担いで、奥穂一万尺登頂の記録写真を撮る。

〈石和田〉テニスで肋骨2本・左掌骨損傷し、リハビリ中ながら、相変わらず「オレンジの炎」のように明るい。

〈春日井〉植物学者風口髭を蓄えた砂漠ツーリスト。2週間前シルクロードから帰ったばかり。登りには強いが下りに弱いのが御愛敬。



〔佐藤〕 緑色装備に身を固めた童顔の山岳隊長。4WD・RV並みの馬力と、鳥を愛する優しさの持ち主。推定55歳前後。

〔高崎〕 会名縁起の人。靴擦れに悩むがJIRONEーム入り手編みソックスを穿いて頑張る。銘酒「ハナタレ」で人を籠絡。

〔松尾〕 散策エリアを涸沢まで上げた挙句、自分は登頂組に転向してしまった、かなり無責任な散策組幹事。

〔3年生の山田君〕 口ほどには達者じゃない我々の脚力を考慮してサポート役を頼んだ。有難う。お蔭で助かったよ。

・下りは恐い

晴天ながら稜線は濃い霧が懸り、楽しみにしていたアルプス連峰の眺望はゼロ。前穂さえ見えない。「見えぬ辺りがジャンダルム。ロバの耳は……」と懐かしの岩形を胸に思い描きつつ、霧がはれるのを待つが、一向に上がる気配が無い。今日の内に横尾まで下りたいので残念ながらタイムアップ。9時55分、しぶしぶ頂上を離れる。

約30分稜線を戻った頃、突然霧の中にモアイ像の如く柴崎氏が出現し、皆を驚かす。「一人で大丈夫。頂上まで行ってくる」と言う氏を「3050mの所まで来たのだから登ったも同然。立派、立派」と妙な説得で強引に翻意させ、一緒に下山して貰う。

10時40分、奥穂山荘のテラスで昼食。涸沢小屋の弁当は味量ともに申し分ない。「今晚どうしますかア」と聞いていた娘さんの笑顔が目につく。

山田君は食後の寸暇を利用して涸沢岳に駆け上る。しなやかな後姿が美しい。俺達もしなやかだったよな、半世紀前は。

11時15分、穂高山荘発。登りと違って何となく膝が頼りない。なかなか高度が下がらない。休み休み3時間かけて何とか予定通り13時30分、涸沢小屋に戻る。

先に横尾に向かったM中さんは画帳片手に鼻歌まじりで穂高を我が家のごとく闊歩する。カモシカ鬚の陽気な隠者。望月さんは自然体で無理をせず、スツと山に分け入って景色を愛で、いつしか自ら画中の人となる術を体得した仙人。2人の後を追う、我々も14時涸沢を後にする。3峰フェース、さよなら。ご機嫌よろしゅう。

行きはよいよい、帰りは恐い。膝は震える、爪先は痛む、横尾までの下り道の遠いこと。健脚のゲリラ組3人には先に行って頂き、残る6人落武者よろしく、杖に縋って休み休み下る。

健脚組に遅れること1時間、17時40分、やつとの思いで横尾山荘に辿り着いた。早速飛び込んだ大浴槽の湯が温かく身に沁みる。足の

親指の爪は紫色に変色していた。

6時40分。オーション会5人連れだつて横尾を発つ。昨日の下りで痛めた脚の筋肉が痛い。大きな段差があると学者髭の春日井がブツクサ文句を言う。松尾は爪先が石を蹴るたびに、痛がつて喚く。石和田は日頃鍛練の賜物か元氣。高崎はだんだん口数が減ってきた。佐藤は双眼鏡で鳥影を追っている。

脚は地獄だが目は極楽。梓川を隔てた真正面に太陽を浴びて広がる前穂連峰の、この素晴らしさはどうだ。甘利もY中も貼り付いた4峰正面の壁が光っている。甲南ルート、明大ルート、A沢もはつきり見える。甘利と泳いだ奥又白池は、もつと下の辺りか。

8時徳沢着。一昨日ここで別れた4人。石原さん、フル装備・単独行で奥穂岳、蝶ヶ岳を軽くこなす実力は、さすが元リーダー。須山さん、夜行便で島々に入ったその足で、往く人も無き秋の徳本を単身越えて来た山旅の達人。T中村、無事に徳本を越えただろうか。電車の時刻など、はなから念頭にない東ヒマラヤ学者。誰も答えてくれなかった「ザイテン」の意味を「SIDE」と即答した博識。上原、自分の野公害を気にして押入れて寝る心優しき学究。梓川沿いの原生林を散策して帰るとの事だったが。



今回の山行の特徴は、全員を一律の計画に嵌め込まない、自由な参加スタイルにあったと思う。皆自分の都合に合わせて、それぞれの山を楽しんでいた。単独行あり、集団登高あり、逍遥、スケッチ、ボードウォッチング、そして全員の会合ありで、その様子はあたかも親しい仲間が行き付けの店に集まって、自分の好きな酒と料理を注文し、会話を楽しんでいる情景に似ている。これは、それぞれ時間都合や体力条件の違うOB山行の理想的なスタイルではないだろうか。

下るに連れて景色が変わり、明神岳が正面に屹立して来た。明神には余りご縁が無かったが、前穂に劣らぬ山容に圧倒される。9時、池畔の穂高神社に無事登山のお礼詣りを済ませ、梓川右岸の新道を上高地に下る。振り返れば視界一杯に岳沢の大パノラマ！ コブ尾根、畳岩、天狗のコル、ジャン、奥穂、吊尾根、前穂、明神よ、若き友の面影よ。さらば、また来る時まで、さよなら。

バスの窓から焼岳、大正池、釜トン、中の湯、坂巻温泉……を眺めつつ、下山。松本駅前「こばやし」にて、蕎麦、馬刺し、地酒で記念登山成功を祝った。鈴木、瀬田、宮川、吉田達の参加がなかったのは残念だったが、先輩後輩多数のご参加を頂き、かつは佐藤の

献身的な尽力のお蔭で、豪華な「オーション会発足49年記念・追悼登山」になった。来年は更にメンバーを増やして、正式に「50周年記念登山」をやりたいものだ。

### ツール・ド・シルクロード (自転車でシルクロードを走る) 続編

春日井 実 (昭和31年卒)

成田を飛び立ち2時間もして飛行機が降下姿勢に入ったので、もうそろそろソウルかと窓の外を見ると、島影が幾つか見えた。見慣れない風景であると思ったら、着陸したのは仁川空港であった。日韓共催のサッカーの



サイクリングスーツで身を固めた春日井。写真提供=春日井実

ワールドカップのため、韓国が新設した空港で、将来のアジアのハブ空港を狙っていると言われている。

ここでアジアナ航空と共同運行しているウズベキスタン航空に乗り継ぐのだが、メンテナンス不良で今日は来ないことが分かった。仕方なく出国手続きをしてソウル市内のホテルに泊まることになったが、30名の団体では市内にホテルがとれないことになり、また入国手続きをして、再度の交渉で空港ビル内のトランジット・ホテルに泊まることになった。この間になんと7時間も待ちぼうけをさせられたが、隊員の中に不平を言うものが一人もいないのが、さすがであった。こういうトラブルは、はなから覚悟している面々である。

新築のホテルは申し分のないものであったが、今頃はタシケントに着いている筈なのになと思うと、腑に落ちないものがあった。とにかくこれが最初のトラブルであった。

翌朝、タシケントからの飛行機は、ゲートで不安な気持ちで眺めていたら飛んで来てくれた。やれやれとホッとした。機中の人となり、雲で覆われた中国大陸の上を4時間も飛んだら、白い雪をかぶった山が右側に見えてきた。天山山脈に差しかかったな、どの辺りで天山山脈を越えるのかなと見ていると、いきなり右に大きく旋回して、真っ直ぐに天山山脈に



向かった。

雲がすっかり晴れ、砂漠を越え赤茶けた山を過ぎると、いよいよ雪で真っ白に覆われた天山山脈の重畳とした峰々や氷河が、次々と眼下に現れる。本場のアルプス越えでも見られないような光景に機内は騒然となり、興奮のるつぼと化した。カザフスタンの草原が現れるまでの夢のような30分であった。昨夜はトラブルと思ったフライト延着が、転じて福となったわけで、幸運そのものであった。後で東京へタシケント間を何回も往復している駐在員に聞いたら、そうした光景は今まで一度も見ることがないと言う。

タシケントで出迎いのトラックに輪行バッグに入った自転車を積み、バスでホテルに向かった。一休みしてから、昨年カシユガルから720km走破して、最後に周回したホテル前の広場で、自転車の組み立てを始めた。20kgもある輪行バッグは乱暴に扱われるので往々にして故障することがあるが、今回は緩衝材として要所要所に詰めた衣類のお陰で無事だった。

翌日は、「のりこ学級」の先生と生徒さん達が、学校のあるフェルガナからわざわざ来てくれた。昨年、当地を訪れた際、定年退職後こちらに残って日本語学級を開いている人の話を聞いて、少しでもお役に立てばと、最

後に余った医薬品・文房具・菓子類を某商社に託して置いてきたことから、交流が始まったのである。目抜き通りのテント張りのレストランで会食をし、そのあと日本文化センターで、歌あり踊りあり寸劇ありの学芸会を披露してくれた。

もちろん我々も草笛やハーモニカ演奏、折り鶴の作り方の指導で返礼をすると同時に、今回は日本から持ってきた文房具の贈呈をした。

この日の夜は通訳として来ているマヒラ嬢の実家に我々30名が招待された。マヒラ嬢はタシケントで日本語を6年間学び、ガイドとなり、その縁で知り合った日本人と結婚して、現在は埼玉県に住んでいるが、我々の要望により里帰りを兼ねて参加してくれたのである。日本語が上手で明るくてユーモラスな彼女がいたことで、英語のほとんど通じないこの国でどんなに助かったか計り知れない。

マヒラの実家はタシケントの郊外にあり、遠くに山が見えるが、この辺りが天山山脈の尽きる場所だという。30名もの大群に対し、親戚全部が集まって準備をしてくれたという、大変心温まるおもてなしであった。この日は2度も異文化との交流を計ったことになる。

◆ 走行第1日目、プラカードを持った「のり

こ学級」の生徒さん達に見送られてタイムー  
ル像を3回周って、いよいよサマルカンド、  
プハラへ向かってスタート。

リーダーが朝からやけに飛ばす。普通朝の最初の1ピッチは、身体を慣らすためにゆっくりと走行するもののだが、13kmも走ってやっと思憩。どうして朝からこんなに飛ばしたのかリーダーに聞いたら、速度計がマイル表示になっていて、いくら飛ばしても数字が15と16にしかならないので、変だと思いがら走っていたらしい。

原因は分かったが「こいつはマイルな」の一言で片付けられてしまった。ちなみに平均時速は25kmでかなり速い。初参加の人がよく文句も言わずについてきたと思うようなスピードだった。次からは速度計も直し、20kmで順調に走る。タシケントを出てからプハラまでの道路は、さすがに主要国道なので舗装も良く滑らかに走れ、昨年とは大違いである。

昨年との違いはもう一つある。道路には高さ90cm位のコンクリート壁の中央分離帯があり、対向車からは完全に安全が確保されているので、我々は中央分離帯寄りのいわゆる追越車線をパトカーに先導されて走る。最後部分は随伴のバスとトラックでガードされるのでまったく安全で、危険を感じたことは一度も





なかった。日本ほどではないにしても、けっこう交通量が多いので、昨年のようにきれいな空気ばかり吸うわけにはいかなかった。休憩時の「西瓜タイム」は昨年同様だが、昼食は昨年のように野原にシートを敷いて食べるのではなく、ちゃんとした道路脇のレストランで食することに変わった。しかし30名もの人数を短時間では処理しきれないので、応援のウエイトレスを連れて来ている。



シルクロード・ツーリングの様子。写真提供=春日井実

ここで我々をサポートしてくれるスタッフを紹介すると、まずパトカーを運転するタシケント警察の交通部長、バス・トラックの運転手・助手、先ほど書いた通訳のマヒラ嬢、現地旅行社のカーシャ、サマルカンドのホテルから派遣された、上記の2名のウズベキスタン美人のウエイトレス、それに日本からの派遣添乗員。この人は、まったくの偶然だが、かつてアメリカ大陸を自転車で行った経験



通訳のマヒラ、現地ガイドのカーシャと春日井。写真提供=春日井実

があり、我々に対して興味と理解があり、大変役立つしてくれた。

走行第1日は初参加者が10名もいたことがあって、例のラクダ草（『針葉樹会報』92号参照）に気づかずにパンクをした人が5名も出た。ご丁寧な前後両輪やった者が2人もいた。

この日の泊まりはシルダリヤ河畔のレストランハウス。ソ連邦時代には共産党幹部のリゾート保養地だったらしいが、いまは荒れ果てている。しかし、屋外での夕食時にテーブルの上が花で飾られている心配りは嬉しかった。久しぶりの来客で、ずいぶん緊張して待っていたらしいとマヒラから聞いた。



昨年のルートは大きな峠がいくつもあり、苦しくもあったが、天山山脈が絶えず眺められるという楽しみがあった。今年はタシケント、サマルカンド、ブハラという観光地として名高いところが含まれているので、参加者が30名に増えた。

暑い夏は自転車での走行には条件が悪いが、できるだけ多くの人に参加できるように、夏休みの取りやすいこの時期にしている。

## カラコルム国際大学

丸子 博之（昭和35年卒）

昨年6月、勤務先の職務を退き、顧問となった。経団連の日泰・日越・日緬経済委員会の常任委員、経済産業省の諮問委員等、いくつかの公務は引き続き担当しているが、自由時間は多い。温泉・ゴルフ・読書三昧も悪くはないが、残余の情熱をかきたて、少しは人様の役に立つこと、40年間のビジネス経験、20年余の海外駐在体験を生かし、少々荷が重い程度の対象はないものかと考えた。

最後の海外勤務地バンコク時代に2度ネパールにトレッキングに出かけた。いずれも年末年始の6日間、慌しい旅であったが、マナスル三山、アンナプルナ山群、エベレスト、ローツエ、アマダブラム、圧倒的な迫力の山々を目の前にして息をのみ、長らく遠ざかっていた山への想いが一挙に高まった。第二の人生を健康で楽しく、より心豊かにするための登山と、ささやかな国際貢献を重ねることが出来れば最も望ましい。

1965年に一橋山岳部「カラコルム・ヒンズークシュ踏査隊」の一員としてパキスタン、アフガニスタンを訪れて以来、二つの国は私にとって特別な国となった。氷河から溶け出す流れを集めた灰色の急流、急峻な岩山、谷間の緑、14世紀から少しも変わらぬ衣服をまとい、石と土造りの質素な家に住み、自然の中に溶け込んだ村人達の営みは、私の心の中で深く刻み込まれ、時間に追われる生活の中、時折感じる小さな隙間を柔らかく埋めてくれた。

峨峨たる山脈と清澄な大気、貧しくはあるが平和で静謐、時がゆっくりと流れていたアフガンが、1979年以降20年間戦火にさらされてきた。多くの村人たちが難民となって水とわずかな食料を求めてさまよう姿に心が痛む。アフガンは中央アジア、シルクロードの香りが漂う。ヒンズークシュは、格別に味わいが深く、何度でも行きたい山域だが、我々がミール・サミール峰を目指して通ったパンジシール河流域は北部同盟の本拠地、近づくわけにはいかない。アフガン全土に1000万個の地雷が埋められている。

まずはパキスタン―カラコルムだ。行き先はフンザ、ナンガ・パルバートに決め、今年4月に出発した。

早春のフンザは杏、桃、山桜が一斉に咲き



誇り、ポプラの新緑が雪山に映えていた。谷のまわりはラカポシをはじめとして7座の7000m峰が屹立し、まさに James Hilton の『失われた地平線』に描かれた桃源郷そのものであった。憧れの山ナンガ・パールバートへはギルギットを経てメルヘン・ヴィーゼで2泊のテント生活。2日目に猛吹雪の中を更に上部へ向ったが4200m地点で断念。ふらふらになって休憩している間に雪が止み、雲が切れて豪壮なナンガ・パールバートの全容が目前に姿を現した。4000mの大氷壁が雲の流れに従って刻々と表情を変え、岩と氷が夕日を浴びて燃えるように輝く瞬間は生涯忘れることはないだろう。

ギルギットのホテルでパキスタンの大学関係者に出会ったことが、私の生活を大きく変えることになった。Dr. Hussein という人物だが、かの Nazir Sabir 氏の友人で、ギルギットに新設される「国立カラコルム国際大学」(KIU)の実現に奔走しているという。話し込んでいるうちに、ぜひ客員教授として来て欲しいということになった。

パキスタンに大学は少ない。北部には皆無なので、優秀な学生はカラチ大学、イスラマバード大学等へ国内留学するしかない。ギルギットに大学を新設する計画は古くからあったが、資金不足で頓挫していたらしい。国の

復興・発展は教育にかかっている。ムシヤラフ大統領は教育振興に熱心で、パキスタン北部唯一の国立大学となるKIU構想は大きく前進し、5月に Ground Breaking Ceremony が行われ、キャンパス建設が始まった。

当初計画は9月開校であったが、建設遅延のため、まずコンピューター・サイエンスのクラスだけが仮校舎でスタートした。私が教える予定の法文系校舎の完成は早くて来春になる。

担当課目は国際経済、国際関係論、国際企業経営の三分野。QTR(四半期)に1回、1ヶ月程滞在、期間はとりあえず2年間。日本―ギルギットを往復する生活となる。1時間講義、続いて1時間の自由討論、これが難物。どんな質問が飛び出すかわからない。学識経験決して豊富とはいえない身ではあるが、国内外で多くの講演を依頼され、タイ時代には大学で講義をしたこともある。実務経験をベースに好きなスタイルでやって欲しいとのことなので、何とかなるだろうと引き受けたが、いささか気が重い。

しかし授業の合い間にカラコルムの山々を登る魅力は何物にも代えがたい。毎回少しずつ高度を上げてみよう。2年間で7000m峰に登れるかもしれないと無謀な夢を見ている。幸い食事には困らない。山奥で辺境の地、

羊と山羊、鶏しかいないが、若い頃イランに6年滞在したおかげで羊の類いは毎日でも飽きない体質に仕上がった。羊の丸焼きは香ばしく、主賓に供される目玉・耳・鼻は大好物だ。とりわけ脳味噌、タマタマの茹でたてはこたえられない。困るのはイスラム国家なので酒は一滴も飲めないことだが、ガンマGTPが長らく200を超えている身とすれば、それも健康に良さそうだ。

たまたま業界担当記者の知るところとなり、7月4日の読売新聞朝刊の「顔」欄に取り上げられた。国内外に大きな反響を呼び、E-mail、手紙、電話が殺到した。最近少ない明るいニュース、男子の本懐と持ち上げられ、また多くの方々から激励文を頂戴した。恐縮至極である。

7月頃から同窓会、仕事の関係者の壮行会が連日続いた。T中さんが読売新聞の購読者だったために、早々とE-mailをくださり、敬愛するT中・丸山両先輩、倉知・小島両兄で、私とカトマンズのホテル・ヒマラヤ三森総支配人の送別会まで開いて頂いた。持つべきは良き岳友、先輩、同僚、後輩、有難いことだ。

9月21日出発予定だったが、9月11日の事件で止むなく延期。ギルギットへはイスラマバードから北へ車で丸2日かかる。ギルギット



トのすぐ東はカシミール、西へ一山越えればカブールである。アフガンは世界最大の麻薬生産国、カラコルム・ハイウエーは麻薬の密輸ルートでもある。近年山賊が出没、誘拐も多い。現在世界で最も危険な地域となった。

人事部長が来て「丸子さん、まさか行かないでしようね」と釘をさされた。危険となるとよけい血が騒ぐのが私のさが。秘書室・人事部の厳しい監視の目をかいくぐって、いかに彼の地へ潜入しようかと思ひ巡らせている。昨今である。多くの方々に御心配をおかけした。

赴任は戦争次第ですが、来春以降になるでしょう。ぜひギルギットにもお出かけください。

## 平川紀男追悼登山

平川 茂（昭和33年卒）

わが弟・平川紀男（昭和41年卒）は、1970（昭和45）年6月、2人の山仲間とともに北アルプス前穂高岳で遭難死した。その直

後の如水会報（昭和45年／9月号）に私の寄稿で「山に逝ける弟（如水会員）のこと」なる追悼文を載せていただいた。彼の記念レリーフが、梓川の上流・奥又白と湊沢の分岐点近くの岩壁に埋めてある。昭和41年山岳部同期生のご厚意で、山仲間の芸大OB制作によるものである。国立公園の中なので、「なるべく目立たない場所に」という配慮から、現場をよく知る同行者の案内がなければ、まず到達不能の難所である。

……レリーフには、こう書いてある。

平川君

漂々として去って行った

君の想い出のために

昭和45年6月28日

穂橋会

去る9月29日、昭和41年山岳部同期OB（佐藤久尚・池知昭洋・原博貞・高崎俊平各氏）と、ワンダーフォーゲル部OBでクラスメートでもあった萩原達也氏の5氏にご支援いただいた。ワイフおよび私の友人ともども、レリーフ現地まで登ってきた。私とワイフはこ

れが2度目である。

1度目（1975年6月末）のときは、徳沢から大きな雪渓を一步ずつ慎重にステップを刻んで登って行き、比較的スムーズに現地まで到達できたように記憶していたが、今回は時期が9月末であったせいか、雪渓はあとかたもなく消えていて、急な斜面には大小さまざまな岩がゴロゴロとまったく不規則に重なりあい、ブッシュは伸び放題に絡まりあつていて、山道はひどく荒れ果てていた。

当日は、早朝に徳沢園を出発。低く重い雨雲の下、険しい悪路に悪戦苦闘、約1時間半でレリーフのすぐ近くまでたどり着くことができたが、そこから直線距離にして20〜30m・高さにしてあと5〜6mの間の足場がまったく悪く、私、ワイフ、友人の3人はどうしてもそれ以上先に進めず、残念ながらレリーフに直接対面することはできなかった。

さすがに山岳部、ワンゲル部OB5氏は全員レリーフ前まで登りきり、ヤブを払ってわずかなスペースを確保、用意してきた花と清酒、それに彼の遺品の万年筆を供えて、線香の煙の中にしばし無言で合掌してくださった。私たち3人は上方を仰いで、追隨して掌を合わせたことはもちろんである。

そののち、持参のビールで献杯、全員で一橋山岳部の部歌「讃山賦」を合唱した。山あ



いにひびく歌声の中に、彼の声も混じって聞こえてくるような気がしてならなかった。

あのとき彼は27歳、富士フィルム写真工業の本社勤務であった。いま生きていけば、目の前の同期仲間と同じように、中年後期で白髪まじり・定年間近のいいおやじさんになっていただろうと思うと感無量であった。

ここまで登れるのは、わが人生でおそらくこれが最後であろうと思い、幾度も幾度もレリーフの山を振り返りつつ、徳沢から明神・上高地への梓川沿いの長い道を、重い足を引きずりながらトボトボと下った。

上高地付近、黄葉にはまだ間があるようだが、かなりの人出であった。

下山途中の悪路で足を踏み外して転倒、左手小指と左膝を強打した。いまに至るも、近所の整形外科通いをつづけているが、長い間の念願を果たして、気分はいたってさわやかである。

今回の登山にあたっては、OB連中との連絡などで、市畑進君にも大変お世話になりました。皆様に厚く御礼申し上げます。

编者注Ⅱ平川茂氏が一橋大学昭和33年卒業同期のネット仲間宛てて書いたものを、同氏の了解を得て転載させていただきました。

## 平川紀男君のレリーフ再訪

佐藤 久尚（昭和41年卒）

私が平川紀男君と最初に出会ったのは、高田馬場にある予備校であった。私が知り合いも無く、いつも一人さみしく教室の後ろのほうに座っていたのに対して、彼は常に数人の仲間と一緒に前のほうの席を占めていて、毎月行われる模擬テストでも常に上位に名前が出ていた。そのため私は、自然に平川紀男という名前と顔を覚えてしまっていた。

そして1962（昭和37）年6月、私が同期の皆よりも少し遅れて山岳部に入部した時、そこにまた平川君がいた。以来、彼とはいくつかの山行をともにし、卒業してからは有楽町のガード下などでよく酒を飲んだ。彼は山では決して強いほうではなかったが、山が好きだから山に行く、酒も決して強くないけれども、酒が好きだからよく飲みに行くという感じで、どこか飄々とした雰囲気漂わせていた。

そんな彼が70年6月、会社の山岳部の仲間

二人と前穂に登って、A沢を下る途中で事故に遭って死んだ。それから早いもので31年が経ってしまった。

その間、我々同期は彼を偲ぶレリーフを作り、奥又の岩壁に設置したほか、同期が一緒にまたは個人的に、数回、追悼登山でレリーフを訪れた。しかしながらその後、同期の仲間は、それぞれが仕事や転勤に追われ、山から遠ざかるにつれて、彼の思い出からも遠ざかっていってしまったようだった。久しく同期の誰からもレリーフ訪問の話が聞かなくなった。私自身も20年以上の間、上高地すら訪れることもなく、彼のレリーフのことも思い出さなくなっていた。

そんな中、5月下旬、倉知さんから手紙をいただき、「市畑さんから話があつて、平川君の兄上（市畑さんと同期）がレリーフ再訪を希望している。レリーフの場所がよくわからないので誰か一緒に行ってくれる人を探している。ついては、平川君の追悼登山を企画してはどうか」との連絡を受けた。倉知さんからの手紙は、まさに長い間忘れていた宿題を突然、指摘されたような感じであった。早速、平川兄上と連絡を取るとともに同期の仲間と日程調整を行った結果、9月29～30日に追悼登山を行うことになった。

今回の参加者は、平川兄上ご夫妻、平川兄



上の友人、同期の高崎、原、池知、佐藤、それに平川君のクラスメートの萩原（ワンダーフォーゲル部OB）の総勢8人。皆それぞれ職場や住んでいる場所が離れているため、29日の夕方までに徳沢園集合ということにし、私と萩原、平川兄上一行は朝8時発の特急あずさ3号で松本経由、上高地入りした。

20数年ぶりの上高地は人が多く、一段と俗化が進んだようであったが、梓川沿いの徳沢までの道は昔のまま、快晴の空に突き上げるように聳え立つ明神の岩峰群を眺めつつ昔登った記憶などを思い起こしながら歩いていたら、あつというまに徳沢園に着いてしまった。

途中、松本で横浜線経由の特急で来た池知と落ち合い、明神では前日、乗鞍岳に登ってから上高地入りした原と合流した。勤務先の富士市から車で来た高崎は徳沢園に先着。幹事としては皆遅れずに集合するだろうか心配したが、29日の午後の比較的早い時間に全員が徳沢園に集合した。その晩は徳沢園に泊まり、平川君を偲んで酒盛り！

翌30日、天気は昨日とは打って変わって朝から厚い雲が垂れ込め、今にも降り出しそうな空模様。せめて午前中だけでももってほしいと念じつつ、8時少し過ぎに徳沢園を出発した。レリーフへは新村橋を渡り、奥又白沢

沿いの道を登る。この道は昔は奥又白沢を目指す者のみがたどる道で、人に会うことはほとんどなかったが、今はパノラマコースと名づけられ、屏風のコルをへて涸沢に抜けるピュラーなルートになっているため、途中、かなりの登山者と出会った。

パノラマコースと奥又白池に向かう道との分岐点までゆっくり歩いて2時間弱、レリーフはここから奥又白を見上げて正面の岩壁、すなわち中畑新道が付いている尾根の末端の岩壁にある。ただレリーフは岩壁の基部で岩が少し抉れたようになった所に埋め込まれているため、岩壁に近づいて見たぐらいではすぐには見つからない所にある。94年の秋、倉知さんが懇親山行の折、訪ねていった時には、草に隠れていて見つからなかったとのことであったが、今回は8月に原が事前に偵察に行つて位置を確認していたため、レリーフの場所を探す必要はなかった。

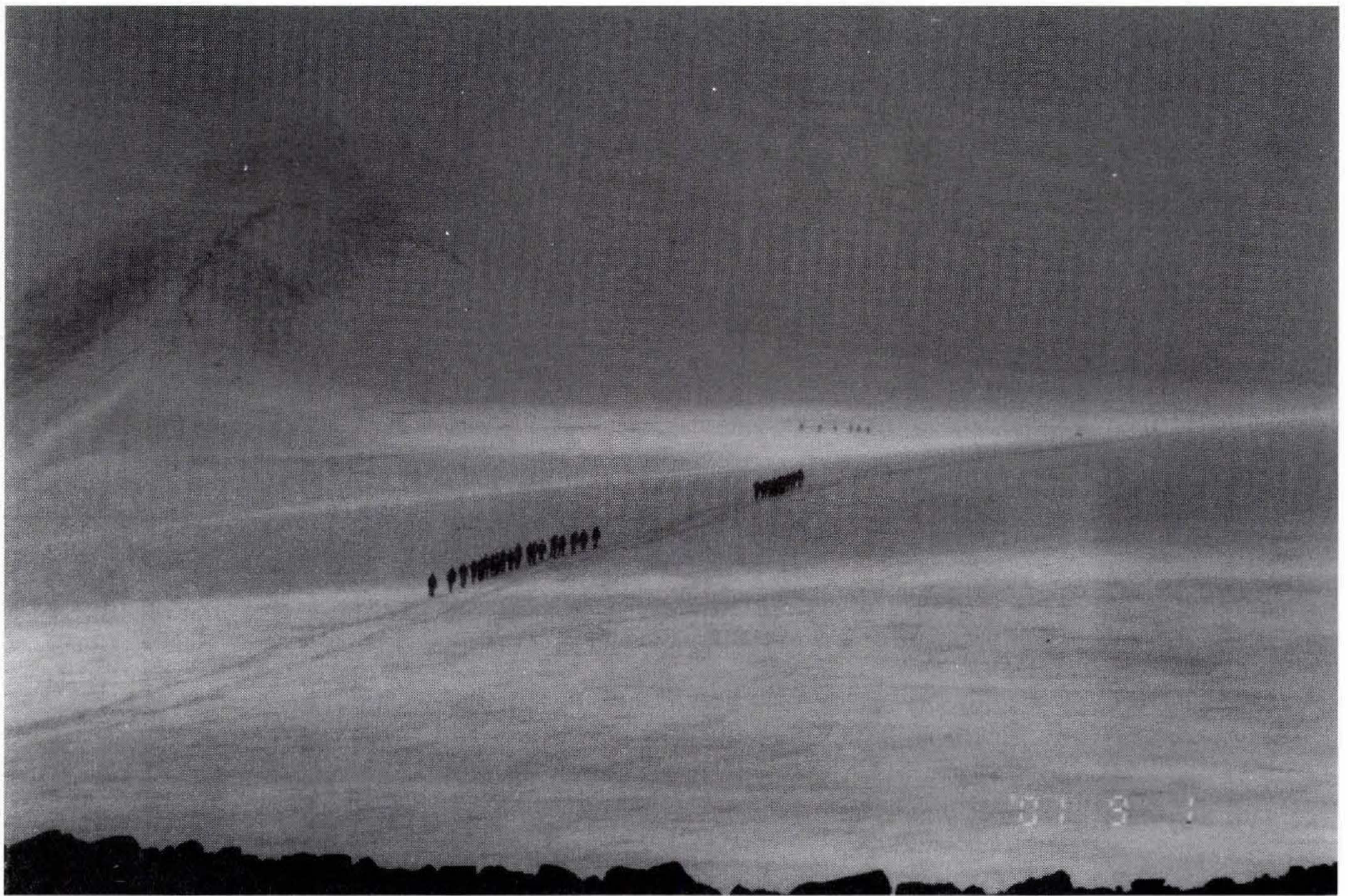
しかしながらレリーフの場所にたどり着くのに苦労した。というのは、我々がレリーフを取り付けた時、あるいはその後レリーフを訪れた時は、いずれも残雪のある季節であったため、簡単に雪の上を歩いてレリーフの場所まで行けたが、今回は残雪が無く、岩壁の基部一帯はブッシュに覆われているうえ、かなりの急斜面で、簡単には下から登れない状

態にあった。また、中畑新道の取り付き付近から岩壁沿いにトラバースする方法もあるが、途中、岩の張り出した部分があり、緊張を要するルートであった。

我々同期と萩原は強引にブッシュをかき分け、急斜面を直登したり、岩壁の基部をトラバースしたりしてレリーフの所まで登ったが、平川兄上ご夫妻とその友人の方にレリーフの所まで登っていただくには無理があった。このため周りのブッシュを切り開き、下からレリーフが見えるようにして、20〜30m下からレリーフを眺めていただくしかなかった（ザイルを持って行けば平川さんにもレリーフの所まで登っていただくことが出来たかもしれないと、後で悔やまれた次第）。

レリーフでは、線香と花、清酒とともに、平川兄上の持参した、平川君が生前愛用していた万年筆を供えて合掌、最後に皆で平川君に長い間の無沙汰を詫びつつ「讃山賦」を歌ってビールを乾杯した。一連の儀式が終わって帰りにもう一度、レリーフを振り返ったところ、線香の煙たなびく岩壁に一瞬、あの特徴のある眼鏡をかけた平川君の顔が浮かんだように見えた。それはにこにこ笑っている顔だった。





ガルホーピッゲン峰前面の氷河を進む登山者の列。  
左上の稜線のかなたに頂上がる。写真=美谷島

## ノルウェー最高峰、 ガルホーピッゲン登頂

前神 直樹（昭和51年卒）

ノルウェーに赴任して早一年、たいした山登りもしないまま、二年目に迎えた夏があつという間に過ぎようとしている時、この機会を逃したらまた来年の夏まで何もできないことに気付き、9月初日の週末、この国の最高峰ガルホーピッゲン（2469m）に登ることを企てた。

ノルウェーのほぼ南端に位置する首都オスロでも、同じ緯度をたどればカムチャツカ半島の付け根に当たるくらいで、夏と冬とでは極端に日照時間が違う。オスロでも6月末の夏至の頃は、白夜とは言わないまでも、夜でも真っ暗という感じにはならない。しかしそれから急激に日の出は遅くなり、日の入りは早くなっていく。

うかうかしていると雪が降り始めて、山に通じる道路は次々と封鎖されていく。9月しか山に行ける機会は残っていないと思ひ立ち、



当地オスロの出光に勤める美谷島さんという、キリマンジャロにも登頂経験のある方と、8月31日（金曜日）夕刻オスロを車で発った。

ノルウェーの最高峰から三番目までの山は、オスロの北約350kmのユツハイメンという国立公園の中にあり、麓のロッジまではおそらく4時間少しで着くと思っていた。首都のオスロでも人口40万人くらい、日本でいえば地方の小都市ほどの規模で、これまで交通渋滞なるものに遭ったことはない。

オスロを出たのは夕方6時、もうとつくの昔にラッシュアワーは終わっているはずの北に繋がる道路が予想に反して車でビッシリ、10〜20分で解消されると思いきや、この渋滞を抜けるのに1時間以上もロスをしてしまった。どうも途中で事故があったらしいのだが、全く原因が判らない。渋滞を抜ければ、いつものノルウェーらしく交通量はがたと減って快適なドライブが続くが、いったいロッジには何時頃着けるのか不安がよぎる。

やっとユツハイメンの端を走る道路に入った頃は夜10時位だったが、これは恐ろしいドライブだった。昼間であればどうということのない道だが、道路に明かりというものがまったく無い夜間は、ひたすら車のヘッドライトだけが頼りで、しかも路肩にペイントがなく、いったいどこまでが道路なのか検討が

付かない。おまけに霧が出てきてほとんどドライブなどという気楽なものでは無くなってしまった。

霧の向こうに明かりが見えて、小さな町でもあるのかと思ったら、車の前面に大型トラックのヘッドランプが突然現れて、衝突するかと寿命が縮まる思いもした。これが一人の運転であれば間違いなく止めて、朝まで時間待ちをしていたところだ。

結局、怖い思いの連続だった運転が終わって麓のロッジに入ったのは午前1時近く、部屋で美谷島さんとビールで乾杯しながら、無事着いて良かったと胸を撫で下ろす。

9月1日（土曜日）。午前6時起床。すでに明るくなって前夜とは打って変わった道をガルホーピッゲンの下にあるユバス小屋まで辿る。山岳道路なので舗装はされていないが、前を行く車がジグザグ喘ぎながら登っていくのが見える。

標高が上がるに連れて森林限界は瞬く間に過ぎて這松もない、わずかに苔くらいが所々に見える荒涼としたところを進むうち、今度は霧ではなく雪が、それも横殴りに降ってくる。正直言ってしまうと自分はこう天候に見放されるのかと少々がっかりだが、とにかく小屋までは行かないと話にならない。

午前7時半頃、ユバス小屋到着、標高約1

800m、辺りはすっかり雪景色。聞けばこの時は今年の本格的初雪という。9月の初日、しかもこの標高で雪とは、さすが北極圏に近いところにあるんだなと感心もさせられる。しかし、こんな天候で登るのか否かは決心がつかない。

そもそも写真を撮りたかった美谷島さんは、こんな何も眺望がない、ただの吹雪の中を登るのは面白くない、自分は登らないと言われる。しかし今回登らなければ前の日のような恐ろしい道路をまた来なくては行けない。しかも小屋に前夜から泊まっていた100人を超すノルウェー人は皆登るつもりでいるらしい。折角ここまで辿り着いたのだからと自分一人で登る身支度を始めた。

ノルウェー人の一人に、登るのであれば午前9時前に出発だからと声を掛けられた。自分は団体登山で来たわけじゃないし、勝手に登れば良いと思っただけだが、正直言って大きな岩ばかりがゴロゴロしている中で登山道がどれかよくわからないし、道標らしきものも無い。しかも目指す頂上がどこかも、厚い雲が垂れていてまったく見えない。標高差からしても3時間くらいで登れるはずだし、慌ててもしょうがない、ここはその他大勢の中に混じって行くかと決め込んだ。

それにしても一緒に登るであろう人間の服



装、装備はお粗末だった。そもそもこの山はハイキングのつもりでも登れると聞いてはいたが、この雪だし、途中に氷河があるはずで、あんな靴でも大丈夫なのかと首を傾げたくなる。

午前9時前と聞いていた出発は結局1時間以上遅れ、リーダーらしき人間が歩き始めた頃は10時を回っていた。まったく植生らしきものが周りに見えない、わずかな踏跡らしき道を前の人間について進む。結果的には総勢200人くらいの人間が列を作って登っている。右には大きな雪の斜面が広がっていて、雪と雲の中をサマースキーに興じている人間が数十人見える。

1時間ほど行ったところで、前方に氷河らしきものが見え、その向こうに岩がミックスした稜線と覚しきものが、ガスの中にぼんやり見てとれるが、先に延々と繋がっているはずの登山者の姿が、すぐ前の丘の影で消えている。

丘に登ったところ、すぐ下から始まっている氷河の末端で膨大な人間がアンザイレンの準備をしていたのだった。一本50〜60mはあろうかというザイルにピッケル、ハーネスの完全装備で固めたりリーダー達が一人一人のためのワツカを作り、それを各人が腰に通している。約30人が一本のザイルに繋がると、準備

が整ったグループごとに氷河を一列になって進んでいく。

こんなにあくさんの人間を一本のザイルで結んだら、一人の遅れが全員の遅れに繋がるなと思ったが、案に相違して遅れる人間はいない。自分の前も中学生くらいの女の子だったが、雪の上をしつかり歩いていった。

氷河自体の傾斜はたいしたことは無かったが、所々口を開けているクレバスが氷河を自在に横切っている。大体は一跨ぎで越えられるもので危険という感じはしないが、一人でこんなところに足を踏み入れたらきつと怖気づくことは間違いない。

氷河の通過は1時間位で、稜線に入るとザイルはその場に置き、各人がワツカを外して今度は自分のペースで進む。稜線も切れ落ちているといふほどのものではなく、既に作られているステップを着実に拾えば、どういふほどではない。横殴りだった雪もそう激しく降るといふものではなく、それにしてもまったく眺望がきかないのだけが残念だ。この稜線を登っていくこと1時間程、人の声はやけにするなどと思ったら、そこが頂上だった。

午後1時、やはり歩き始めから約3時間の行程だった。まったく眺望のないガスの中で、テルモスのお茶を飲み、前の晩に作った握り

飯をほうばる。登れて嬉しいのか、数人で歌っている人間もいれば、寒い中シャンパンで乾杯している人間もいるし、ワインのビンを持って仲間を探している人間もいた。

眺望がない頂上にいつまでも居る理由もなく、アイゼンをつけてさっさと下ることにしたが、おそらくアイゼンを持っていたのは、リーダーを除けば自分一人だったような気がする。稜線から再び氷河に入るところで本来ならザイルを繋がなくてはならないのだろうが、つい今しがた通ったばかりでまだトレースもハッキリしていて、何十人もが準備をするのをこの寒い中で待っているのも面倒で、帰路の氷河はそのまま一人で通過してしまっただ。

美谷島さんが待つ小屋に戻ったのは午後3時過ぎだったが、美谷島さんはその間、氷河のほとりで一瞬でも頂上の見えるシャッターチャンスはないかと3時間くらい粘ったとか。しかし、そのチャンスはまったく無く、氷河を蟻のように一列になって登っていく登山者だけを見送るだけになってしまったということだった。

小屋の前に止めた車に乗り込む。前の日に肝を冷やした道路はそのころにはすっかり晴れ上がり、これが同じ道かと思うくらい、今度は順調に飛ばす。



荒涼とはしているけれどノルウェー有数の絶景地であるユツハイメンの景色をとこところで美谷島さんはカメラに収め、オスロ帰着は夜の8時頃だった。

頂上で何も見えなかったのは残念だが、来年は時間も掛かるし、ルートとしても難易度が増す、二番目、三番目の山に行ってみようかと思っている。天気にも恵まれることをだけを祈って。

(実はこの原稿は本当であればノルウェーの最高峰ではなく、ヨーロッパの最高峰であるモンブランの登頂記にしたかったのだが、今年8月始めにトライはしたものの、降雪にあつて3800m地点で敗退、体力が無くなったことを認識させられた山行になつてしまった。しかし時間の合間を縫ってシヤモニーの上の方を歩いたハイキングでは、天気も良くて、ドリユ、グランドジョラスの驚くような山容を心行くまで満喫させてもらった。ノルウェーもまだまだ登りたい山はいくらでもあるが、せめてこちらにいる間にモンブランだけは登ってみたいと思っている。すべては来年の課題)。

## 三浦半島 地形が語るもの

川名 真理 (昭和62年卒)

横浜・金沢八景に引越して1年がたちます。この間、山らしい山へは行っていません。土曜日の午後などに新しい土地を散策しています。どちらかといえばシブイ、ご近所だからこそ行く気になるような場所でも、実際に歩いてみると歴史の一場面がはるか彼方にかすんで見えるような気になる場所があり、密かな喜びを感じています。

たとえば朝比奈切り通し。鎌倉に7つあった切り通しのひとつで、京浜急行逗子線「六浦」から、車道を20分ほど歩くと入り口があります。20分ほどで鎌倉側へ抜ける、ごく短いハイキングコース。三浦半島の付け根を横断する位置にあつて、東端が六浦、西端が鎌倉にあたります。鎌倉時代に舟で運ばれてきた積み荷は、六浦の港を経由して、この切り通しから鎌倉へ運ばれたとのこと。鎌倉の浜が港に適さなかったためだといえます。

ということと六浦は当時、大変にぎわったところですが、こちらに来るまで名前すら知りませんでした。

今は昔の海岸線も埋められ、まったく往時の面影をとどめない六浦ですが、ここを起点に鎌倉まで歩くことで朝比奈切り通しが当時の高速道路のようなものだったことが実感されます。馬車がちょうど通れるくらいの幅、緩やかな勾配をもつ切り通しが、場所によっては10mほどの落差をもって掘り下げられ岩場に刻まれている様子は、見るからに人工的で、その道を絶対的に必要とした当時の人の執念を感じさせます。

眺望が爽快このうえないのは大楠山。標高241mながら三浦半島一高い山で、房総半島、大島、伊豆半島、富士山と360度のパノラマを見渡すことができます。三浦半島がミニサイズだからこそ、海の向こうに弓なりに横たわる半島や島を雄大に眺めることができるわけで、ほかではなかなか得られない光景かと思えます。

天然の地図を見ることができこの場所は、かつては戦略を練るうえで大切な情報源となつていたのではないかと思えます。源頼朝は石橋山(現小田原市)の戦いに敗れたのち、三浦半島から小舟で房総半島へ逃れたそうですが、その道のりもここから一望できます。



また葛飾北斎が描いた浮世絵に、江戸を中心に房総半島、富士山までをカバーする鳥瞰図があり、その想像力に驚いたことがあります。この山に登っていたとしたら、かなり参考になったことでしょう。

最近行った浦賀も地形に見どころを感じました。入り江が細長い長方形のような形をしていて、まるで造船のために人工的につくられた港のように見えます。それが人工的でないとわかるのは海への開口部以外の三方(東、北、西)が小高い山に囲まれているからです。ペリーの船がこの入り江に入ってきたときの港の俯瞰図(複製)が地元の資料館にあるのですが、いわゆる黒船が浦賀奉行所の小舟10艘ほどにぐるりととり囲まれている様子が描かれていて、当時の大騒ぎが伝わってくるようです。入り江の形が現在と変わっていないので、よりリアルに感じられます。

初めて太平洋を往復した日本船、咸臨丸が造られたのもここですが、その出発の光景をテレビ中継するならここしかない、という絶好の場所が入り江の西側、丘の上にあります。どんづまりから海への開口部まで、細長い入り江が一望に見渡せます。資料館にあった咸臨丸の模型をその景色の中に置き、それがゆつくりと出航していく様子を思い描くと、時を隔てて興奮が伝わってきました。

## 九州山登り小話

沢沢 貴子 (平成8年卒)

原稿依頼を気軽に引き受けたのは良いものの、はたと考え込んでしまった。「ここ何年か、山に関して特別書くようなことあったわけ」。とりあえず、過去の会報を読んでみる。みなさん中国だアメリカだヨーロッパだと、うらやましい限りの登りっぷり。我が身をかえりみれば、チマチマした日帰り登山ばかり、年に1、2回の「雪山」や「縦走」もどうってことないフツターの山だしなあ。

おまけに、山を仕事に生かしたこともほとんどないぞ。山帰りに支局に寄って、デスクに「原稿が足りん、写真に何か文つけて出せ」と言われたときと、あんまり人騒がせなだけのアホらしい遭難が続くもんだから、登山用具店のご主人と「最近の若者はなつとらん」的な、年寄りの愚痴のような話で盛り上がり、それを検証記事に仕立て上げたときくらいだ。うーん、どうしよう。

あ、私新聞記者です、一応。「こんなんで

も記者できるんですね」と言われそうだな。そういえば昔、大学院合格を部に報告したとき「大学院って、沢沢さんでも合格できるよ」と言われた。うなづいて「うなづいて後輩がいたっけ」。

まあいい、小話を集めてお茶を濁すことにしよう。ちなみに、私は札幌出身で、九州に対する独断と偏見に満ち満ちています。九州出身の人、すいません。

◆ 初任地は宮崎支局。会社から通知が来たとき、宮城の間違いかと思った。だって、道産子にとって「日本」は関西までで、それより先は想像力の外にあるんですもん。

最初に思ったのは「雪降らないじゃん」だった(実際はそんなこともないが)。九州の山というと、阿蘇しか知らない。「つまり、山スキーはできないってことよね(これは本当だった)」。私は悲しくなった。

もつとも、この商売で山に登ろうってのがそもそも間違いではある。内定祝いの宴会で人事担当と話していたら「まさか就職してから山に登ろうなんて思っていないだろうな」と言われてしまった。そのときは「いやー、まさかあ」と笑って済ませた。こっちは覚悟はできていた。実際、仕事を始めてしばらくは、休みになると昼過ぎまで泥のように眠る



日々、とても山に登る気力は沸かない。

ところが、仕事に慣れてくると「禁断症状」が出てきた。幸いデスクがワンゲル出身だったこともあり（机の上には『山溪』が並んでいた）、半年ほどで登山を再開した。

日帰りの手ごろな山に行くだけで、生き返ったような気がした。正直言って、予想した通りケチな山ばかりだが、それでも「土や落ち葉を踏みしめながら、自分の足で頂上を目指す」ことには、何にも代え難い喜びがあった。それに、中には「ほほう、九州もあなどれんな」って感じの山もある。とりあえずお勧めの山を挙げてみよう。

#### ○宮崎近辺

霧島山（韓国岳・高千穂峰）、祖母山・傾山、尾鈴山。大崩山が溪谷美と岩が素晴らしいの評判だが、私はまだ登ったことがない（これって「アルプスは登り尽くしたが槍ヶ岳はまだ」って言ってるようなものかも）。

#### ○その他

阿蘇山（高岳・根子岳）、九重山群（久住山・大船山）、由布岳、経ヶ岳・多良岳。はい、言われなくても分かっています、屋久島はまだです。冬に行こうとしたらデスクに「一人でラッセルしようってのか」と中止命令を受け、以来足が向いていない。

九州の良いところは、厳冬期を除いて沢登りができること（なにせ宮崎なんて、10月になつても海や川で泳ごうと思えば泳げる。実際にやるのは私ぐらいかもしれないが）。

特に宮崎の沢の美しさは、思わず息をのむほどだ。南国らしい明るい日差しを受けて、川の水は宝石のような緑色をしている。透明度は抜群で、ダム湖のように深い淵の底まで見えるぐらい。エメラルドグリーンの水の底で白い玉砂利がキラキラと光る、流れのほとんどない、深さ4、5mはあろうかという淵の中を、大小の魚たちが群れをなし、まぶしいほどの銀色に輝きながら泳ぎ回る……。ほんと、カラー写真でお見せできないのが残念。

もう一つ見直したのが樹氷。厳冬期の韓国岳、正月前後の祖母山は、全山白い花が咲いたよう。雪はうっすらとかぶる程度なので、夏山ペースで登れるのがお得。同じく正月の大船山も見事な樹氷だったが、翌朝には元の枯れ木の山に戻ってびびくりした。気象条件によつてあつという間についたり取れたりするらしい。

それでも、夏休みに北海道の山を登ると、「やっぱりスケールが違うよな」と思ってしまうのだった。ちなみに、案外知られていないと思うけど、摩周湖の外輪山であるカムイ

ヌプリは、往復3時間程度で雄大な景色が楽しめて一押しです。

もつとも、そう簡単に仕事から解放はされない。あるとき、沢登りの最中にポケベルがピーピー鳴った。「こんなところに公衆電話なんてないよ、どうしよう」。どうしようもない。仕方がないから、無視した。下山してから支局に電話し、恐る恐る「あのう、4時間くらい前にポケベル鳴ったんですけど……」と言ってみた。アルバイトの女性曰く「支局長が大丈夫なのか心配してかけたみたいですよ」。余計な心配をさせるんじゃないよ。

気にかけていたのは確からしい。「いつもどこに泊まってるんだ」「車の中です」「そんな危ないことをするな、襲われたらどうする。ちゃんと宿を取れ」「はあ」。大事な娘さんを預かっている身としてはだな、と言われた。次の山では、きょうはキャンプ場に泊まります、管理人もいるから大丈夫です、と説明して納得していた。気持ちには有り難いけどなあ、と思いつつ、それ以降は「無断車泊」した。ごめんなさい。

次の支局長も良い人だった。GWに白馬で山スキーをしたとき（Fさん、その節は随分お世話&ご迷惑をおかけしました）、夜携帯



に電話をかけてきた。酔っているのか、やけにご機嫌だ。「おう、山はどうだったか。楽しかったか、そうか。事件はこつちに関係ないから安心しろ」。はて、何のことだろう。後で知ったが、そのころ、まさにバスジャックが高速を北上中だった。南下してたら緊急招集だった。ぞっとした。

携帯は便利だが、24時間連絡を取れる状態にあるのが前提だというのは、結構しんどい。まさに山に登ろうとしているときに原稿の問い合わせが入るし、携帯が通じないので仕方なく山小屋の公衆電話で取材したこともあった(そんな状況で山に行くなよ、と言われそうだが)。休憩の時や温泉に入った後などは、必ず「圏外」「着信あり」の表示がないか確かめる癖がついた。山から降りてきて温泉入ってのんびりしているところに「きょうお前の原稿使うからチェックしてくれ。ファクスはないか」「……。いいです、支局に上がります」。一服する間もなく、高速を飛ばすのであった。

◆ 宮崎の悪いところは、私の嫌いな生き物が巨大化しているということ。私はガマガエルが大嫌い(小さいアマガエルは可愛いけど)。昔の部室を知っている人は分かると思うが、あの辺をうろろろしていたカエルは最悪。一

度大掃除の日に流しの下のバケツか何かを取ったら、4、5匹うずくまっていた。卒倒しそうになったことがある。

沢登りをしようと、駐車場兼休憩所に泊まったときのこと。ふと木のベンチに座ろうとして、ぎよっとした。足元に巨大なカエルが鎮座しているではないか。ウシガエルとかいうヤツだろうか、焦げ茶色で表面がごつごつした感じ。座った状態で背の高さが20cmぐらい、手に乗せるんなら両手にすっぽりの大ささだ。大げさじゃないですよ、ずーっと動かないでいるから、寝るまでに何度も見に行つて、じっくり観察しました(いわゆる怖い物見たさつてやつ)。

翌朝、ヤツはいなくなっていた。気を取り直して沢登り。天気も良いし、溪相も思った以上に素晴らしい。

この板谷川(木城町)の出会いからすぐのところにある祇園滝は『九州の沢と源流』(著者||吉川満、発行||葦書房)で「今まで接した滝の中で一番立派」と紹介されている。周囲は断崖絶壁、V字型の落ち口から、80mの高さを滝壺までまっすぐに水が落ち、迫力満点だ。滝の上は浅いナメで、度胸さえあれば目がくらむような高度感を味わえる。私は四つんばいになって下をのぞいてみたが、背中がむずがゆくなった。

この沢は花マルである。明るいいし、歩きやすいし、大きな滝がいっぱいあるし、初級の沢とは思えないほど楽しい。弾んだ気持ちで跳ぶように沢を下つた(ガイドでは山頂直下の登山道まで遡れることになっているが、上流部が倒木で埋まってしまっていて、引き返すしかなかった。巻き道はしっかりしているのでザイルは不要)。

そして、黒っぽい石の上に足を置こうとした瞬間、悲鳴が出た。ヤツだった(いや、ヤツの仲間かもしれないけど)。危うく巨大なカエルを踏むところだった! 踏んだときの感触を想像すると吐き気がした。だめ押しに目の前をヘビが横切るし、足にはヒルが2、3匹くっついていていた。すごく良い沢だったが、二度と行くまいと思った。

◆ 何か救いのないエピソードになってしまったな。現在の境遇がそうさせるのかもしれない。私は9月に佐賀支局に転勤した。

佐賀、ああ佐賀。「低平地」という言葉が象徴するように、佐賀市は全国の都市(県庁所在地なのか市なのか、その辺はよく知らないが)のなかで、平野部の占める割合が最も高いところ、だそうだ。県内最高峰の経ヶ岳はわずか1076m。これって九州7県で最低である。最もポピュラーな背振山(105



5m、県内第2位)は、車で山頂まで行ける代物だ。

田んぼばかりだから、アジア最大規模の国際熱気球大会なんてのが開けたりする。風の吹くまま、どこに流されても着地するところがあるというわけ。山は気球の大敵である(気球でアルプスやヒマラヤを越える人もいるが、熟練者じゃないと危険)。

11月4日、記者の特権で気球のフライトに同乗させてもらった(もちろん仕事ですよ)。ほんの数分で上空600mに達し、佐賀平野が眼下に広がった。眺望は360度なんでもんじゃない、全球だ。南に有明海、北に背振の山並み、真下には嘉瀬川をはさんで田んぼのパッチワーク模様。「登山する人は、セスナとか気球とかのスカイスポーツをやらぬ方がいいって言うけど、本当だなあ」としみじみ思った。

それでも、重力に逆らって、わざわざ歩いて山に登るなんていう愚直で原始的な行為が、やっぱり私は好きらしい。「普通の観光地になら年取ってからも行けるよな」と、天気の良い休日には、ついつい山に向かって車を走らせてしまうのだった。

## 会務報告

### 総務幹事より

・加藤正巳さん(昭和43年卒)が9月17日にご逝去されました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

・故・松下順吉さん(昭和19年卒)夫人・亘子さまより、針葉樹会へ金一封をご寄付いただきました。謹んで頂戴いたしました。ありがとうございます。

### 会計幹事より

11月中旬から下旬にかけて、今期針葉樹会会費未納者に督促状をお送りしました。約50通送ったところ11月末現在10人から送金がありました。

なお今回発行の針葉樹会報95号より3年間会費滞納者は休会扱いと致しました。つまり名簿には休会中を表す印を付け、会報等の発送は致しません。今回の督促状にはその旨記してあります。

返信の中に住所変更が2件ありましたので紹介致します。

・斉藤 正(昭和42年)

〒330-0013

草加市松江1-24-3-503

TEL 048-935-8193

・米田篤祐(昭和55年・在ロンドン留守宅)

〒277-0031

柏市亀甲台1-15-2

TEL 0471-62-5077

### 月見の宴報告

11月3日に恒例の「月見の宴」が開かれました。おでん、チゲ鍋、各種アルコール類で学生にもてなしていただき、おおいに盛り上がりました。ごちそうさまでした。

月見の宴の2、3日前に新入部員(女子、2年生)が入ったとの報告がありました(当日は欠席)。また、佐藤さんを中心に針葉樹会の今後についての話で盛り上がりました。後半は口フトの「人工壁」にみんなでチャレンジ。宗像、山田以外には、本物の人工壁は難しすぎるため、部室を施工してくれた方がおまけでつけてくれた「人工壁のようなもの」で遊びました。

出席者 石井左右平(昭23)、横山皖一(昭27)、中村正司(昭28)、佐藤恭(昭31)、上原利夫(昭



33)、市畑進(昭33)、小林博(昭33)、三井博(昭33)、竹中彰(昭39)、西牟田伸一(昭47)、井草長雄(昭48)、引地真(昭55)、川名真理(昭62)、井上裕之(平1)、宗像充(平12)、山田秀明(現役3年)、遠藤貴宏(現役1年)、鳥本真司(現役1年)

●注

「オーション会」……昭和27年に入学し、主に31年に卒業した山岳部同期の集まり。故甘利仁朗、中村幸正両氏はその中心的メンバーだった。(編集子)

雑記

\*12月3日付日経新聞に記載の日本郵船会長根本二郎氏の「私の履歴書」より。「九才年上の兄は一橋大から当時の三井物産に入ったが、山登りと俳句、園芸を愛する教養人であった。短期現役として海軍主計大尉として終戦を迎えた。長ずるに及んでよく二人で酒を飲み、啓発された。私たちは伝統的な価値観、併せて大正時代からのよきリベリズムの影響をも受けていた。」この兄とはご存じ、故根本大先輩(昭和17年卒)のことです。

\*中村正司さん(昭和28年卒)が12月上旬の「都民美術展」に力作2点を出展されましたが、その内の1点が栄えある特選に選ばれました。おめでとうございます。てつきり山の絵と期待して出かけたところ、絵の主題は2点ともご本人お得意の(?)シャランソんで「コメディアン」という題の作品が特選作でした。

\*如水会会報12月号号「橋畔人消息」によると針葉樹会会員、佐々木誠さん、鷺崎雄四郎さん、船本文治さんの3人の方が如水会より88才の米寿のお祝いを受けられました。また石井左右平さん、大島理則さん、関恒義さん、山崎壙さんの4人の方が77才の喜寿を迎えられ、如水会の長寿会員に推薦されました。おめでとうございます。(編集子)



## 編集後記

\*今号もお二方の追悼文をおのせすことになりました。樋口さん、加藤さんのご冥福を心からお祈り申し上げます。樋口さんにはつい先頃、91号に原稿をお寄せいただいたばかりでした。是非本号とあわせて再読下さい。

\*本号の編集からさきに編集委員に加わった川名さん（昭和62年卒）が大いに戦力として貢献しています。今後の会報の充実にご期待下さい。

\*本号には川名さんに加え淵沢さんからも原稿をいただきました。女性会員の原稿が会報に載るのは多分、会の歴史始まって以来の画期的なことではないでしょうか。（佐藤）

\*現役のとき、若手OBだった加藤さんにはコーチャー会などで随分お世話になったので訃報をお聞ききするのは残念でした。もう20数年前、三森さん、加藤さんと三人で乗鞍岳に登ったことを思い出します。

\*創部80年ともなると、最古参OBと若手OBでは親子どころか祖父と孫ぐらいの隔たりがあるわけで、記念事業をやろうといっても足並みがそろわないのは考えてみれば当たり前のことかもしれません。新年会でも大いに論議が盛り上がり上げればと思います。（井草）

\*いろいろと至らぬところがあるかとは存じますが、よろしくご指導・ご鞭撻くださいま